勝諺藏著作

演劇脚本

弘法大師御傳記

續十幕

特51
655

演劇脚本

弘法大師御傳記

場割

一幕目　佐伯直氏舘の場
讃州捨身ヶ嶽の場

二幕目　大和國槇尾寺の場
同方丈火水觀法力試合の場

三幕目　播州舞子濱邊の場
右衞門三郎鐵鉢割の場

四幕目　船頭山田小莊治住家の場

五幕目　右衞門三郎家敷の場
同下男部家の場

六幕目　賀川照主舘の場
同愛妾小櫻殺しの場
同奥庭綾子物狂の場

七幕目　阿波國立江寺の場
同燒山絶頂の場

八幕目　藤の賀能館の場
（西寺門前の場）
朱雀野身替り地蔵の場

九幕目　（神泉苑空海雨乞の場）
（西寺守敏僧都修法の場）

大詰　紀州高野山の場

演劇脚本

弘法大師御傳記

全續十幕

序幕　佐伯直氏館の場
讃州捨身ヶ嶽の場

役人替名

阿乃の宿禰大足
佐伯直氏
勅使和尚操
直氏の室豐海
一所一化子園

一腰元紅梅
一同花野
一一子眞魚稚
一百姓四人
一雜掌二人

○本舞臺上ノ方瓦屋根幕張をせし白木門是より下手筋塀紅葉の釣枝都て佐伯直氏館の体裁
○百姓四人鐘太鼓を鳴し萬度を持ち獅子頭を冠り舞ふて居る腰元二人見て居る此見得獅子舞の鳴物にて幕明く

紅梅「コレ喧ましい」　花野「靜まらしやれ」　□「何の事じや今歳の出來が目出度いと御領下の百姓一同お歡こびに來たものを」　紅「サアさうでもあろうが若君にはまだ三ッ四

ッよりお遊びには土をつがねて佛を作り」　花「夫を拜み敬ふゆへ誰言ふともなく貴物樣と曰る〻程の若君樣物やかましい事と　両人「れ嫌ひじやわいのウ」　○「ハア夫で貴物樣の謂れが分つたお嫌ひなさる事なれバ是から隣村を押し舞わふでとあるまいか」　三人「夫がよい〳〵　□「御祈禱〳〵」〔ト皆々橋懸りへ這入る向ふより雜掌一人出て來り〕

雜掌「今朝お達し申置し主人阿刀の宿禰大足樣御立寄にムれば此段れ知らせ申すでムる〔ト言捨て這入る〕　紅「スリヤお客樣のお入とな」　花「此由殿樣へ片時も早う」　紅「サアムんせいなア〔ト門の内へ這入る是を薄ドロ〳〵にて空より紫雲を下し向ふより大足雜掌二人附添ひッカ〳〵と出て來り〕　大足「ハテ心得ぬ一段の紫雲空に棚引き麝香芬々として一天王の尊体朧氣に拜まれ給ふと正に權化の貴人をば守護し玉ふと覺えたり何は然れ直氏に對面なしてさうじや〔ト舞臺へ來る門の内より佐伯直氏室豐海腰元附添ひ出て來り〕　直氏「是は〳〵大足殿には唯今お着に候や佐伯の直氏是迄お出迎ひ仕つて ムり升る」　大「是と〳〵御叮嚀なるお出迎ひ大足祝着に存ずる」　豐海「兄上にはイザ先是へ」　直「コリヤ床几を是へ」　腰元「ハヽ〔ト床几を直す〕　大「其方等は座敷方にて相待居れ」　雜掌「畏つてムり升る〔ト腰元と門の内へ雜掌は橋懸りへ這入る〕　直「承はれば伊豫親王御領分御巡見の由お役目御苦勞に存じ升る」　大「親王家には近比京都に渡らせ玉へば某とても彼地の住居無音にのみ打過ぎたるお詫旁々此度びの役目をば望びで下向致せし大足シテ眞魚稚は息災なるか」　豐海「サア聞て下さりませ幼は時より土くれをつがねては佛菩薩の像を作り又木の端くれにて塔の形を爲し悲しいは出家をばさせて呉よと父母への願ひ」　直「唯壹人の我子をば出家をさすも本意なく思ひ居つたろ處好き折柄の貴殿の御下向願くば彼が出家の望みをば思ひ止まるやう御異見なし下されい」　大「何と然れ某も久々にての對面なれは一應彼にも逢ふた上兎も角も計らひ申さん〔ト是を時の鐘に成り〕　大「アリヤモウ暮六ッ秋の日脚といひながら夕暮早き屏風が浦」・　豐「西を塞きし山の手と我子が常に拜禮の」　大「日輪沒して清光の月海原にさし上る」　直「せめて今宵のもてなしに」　大「一ト夜の御無心仕らん」　豐「左樣なれば兄上樣」　大「直氏殿」　直「イザ御案内」　皆々「致しませう」ト此見得よろしく這入りの唄にて此道具ぶん廻す

○本舞臺後ろ黒幕壹間大高の二重是より下手へ下りなばへの岩組の賦込み上手岩山の出し掛け二重の向ふ谷の心松の釣枝都て讃州捨身ケ嶽の体月をおろし此摸樣一セイ山風にて道具納る

ト向ふより眞魚稚走り出で來り　眞魚稚「人目の關を忍び出で此お山を心ざして來りしも

我年頃の大願空しく父母のお免しあらざれば身を三寶の鑑となし生死を以て試み然うんじ
やと〳〵ト舞臺へ來り二重に登りいかに十方の諸佛今眞魚稚が申事聞てたべ我出家の望みあ
らざと雖も一人の子なるが故結緣の恩愛切にして今に素懷を遂ず希くば佛神我志の如く沙門
となるべきならば生命を助けたび玉へ又願ひ空しからんには此谷底へ飛落て立どころに死
すべきなり今眞魚稚が願望の應否を試す身の祈誓救わせ給せ殺させ給へト上手の岩の後ろ
へ飛込む是をドロ〳〵責木にて岩の鯉より紫雲を引上げ二重の上に舞ふことあつて空へ引
上る眞魚稚二重の上に立つて居てハテ心得ぬ今此千丈の谷底へ飛落しと思ひしに主は誰と
も分らねど微妙の御聲高々と我を助け給ひしは夢幻に覺ふれども我は元の處にありて身内
に一ッの疵さえなしかゝる奇瑞を蒙むる上は此身の願ひ空しからず覺えたりチェ、忝けな
い去ながら父母に隱れて舘を出たれば御心附かゞ案じ給わん左もあい内に片時も早く立
歸らんソレ〔ト向へ走り這入る此時二重下手より勸操和尚行脚の僧の拵らへ了圓所化旅形
にて笈を負ひ網代笠を持出て來り〕　了圓「師の御坊唯今の不思議をば御覽あそばしまし
たか」　勸操「我斯く錫を曳くも靈地をもとめ佛堂を建立せん志願にて唯今當所通行の折
柄紫雲空に棚引き渡るゑ正しく靈地と山上へ登り見れば今の有樣空より天女天降り宙にて
抱き助けしは權化の芋凡人ならず定めし仔細のある事ならん遠くは行まい了圓來れ」　了「

心得まし」　勸「ソレ〔ト一セイ山颪にて向ふへ走り這入る此道具知らせに附きぶん廻す
○本舞臺幕明の道具に戻る但し門の扉建切りあり時の鐘早い合方にて道具納まるト向ふよ
り眞魚稚走り出て來り直に舞臺へ來り　眞「最早門戸を閉たれとも人知れずゑ、然うじ
や〔ト用心溜を足代となし塀を乘越え内へ這入る勸操和尚了圓附添ひ走り出て來り〕　勸「
訝かしき稚兒の振舞音信て見よ」　了「ハッ〔ト舞臺へ來りお頼み申す〳〵ト是にて門を
開き腰元二人雪洞を持出て來り〕　紅梅「御案内はどなた樣に」　兩人「ムり升る」　了「
是ゑ廻國の沙門にて石淵の勸操和尚と申者仔細あつて夜陰の立寄り」　勸「チト御主人に
御意得度き義のムれば此段取次きを願ひ存ずる」　紅「何事の御用か存じませねど一應申
上て見ませう程に」　花「暫時是にてお控えなされて下さりませ〔ト門の内へ這入る直ぐに
門の内より以前の大足先に腰元附添ひ出てたり來り〕　大足「是は勸操和尚には不思議な處
で面會いたした」　勸「チ、左樣仰せらるゝと阿刀の宿禰大足殿」　了「思ひ寄ざる其許
樣が」　大「不審も尤も當家は我妹舞たる緣に依り此度び巡見の序を以て今宵一宿致せし
處貴僧のお越と承はり出迎ひ旁々參りしがシテ當家には何用あつて」　勸「あながち用事
と申にゑムちねども能々尋ね參りしも當家にゑ拾二三歳なる兒がムるか」　大「夫ゑ拙者
が甥にして名は眞魚稚と申せども佛法歸依の心深く神童又は貴物なゝ靈名を受けし當家

の一子」　勘「扨こそ我推量に相違なく末頼母敷き樞化の貴人寶は此事に就て不思議の義あり主じに面會致せし上御物語り仕らん」　大「いかゐる義かは存せねども何は兎もあれソレ御案内」　腰元「畏まりましたイザお越あそばされませう〔ト皆々門の内へ這入る橋懸より幕明の百姓入山村といふ提灯を持出て參り〕　○「入山村で喜こび酒をよばれたので」　△「夫故獅子より自分の目が舞ひそうじやわい」　□「目が眩るとは何事じやれりや此門が三ッに見ゑるわい」　×「コレ喧ましふ云ふな畫でさえ小言をきいた此お屋敷」　○「サア皆の衆靜かにして往んだり〳〵」　△「夫でも夜道は氣味が惡い鉦と太鼓で遣ッつけろ」　○「エ、ならぬと云ふに」　△「ところが鳴は〔ト鉦太鼓を叩き立る〕　○「エ、困った奴等じやなア〔ト曲撥に成り獅子頭を冠り鳴物を叩き立て捨臺詞にて向ふへ這入る此道具知らせに付ぶん廻す

○本舞臺平舞臺見附金襖上下折廻り塗骨障子家体大棚間を卸し中央に日の出の衝立都て佐伯直氏館の体茲に直氏豐海大足動操了圓住ゐ紅梅花野後ろに控へ居る半廻りより合方にて道具納まる

直氏「合点の行ぬ貴僧のお言葉一人の子は厶れども性得氣鬱にして世さへ他所へ出ざる者が夜中舘を出べき筈なしモシ人違ひにムらぬか一　勘「其御疑念も尤もなれど今大足殿より承これば常に佛道に心をよ寄せらるゝ由左すれば不思議なしとも言れず　大足「何樣夫も計られず論より証據は眞魚稚を是へ呼び出して問ふて見やれ」　豐海「コレ腰元共眞魚稚を是へ呼びや」　両人「畏りました若君樣〳〵〔ト奥にて〕　眞「唯今夫へ〔ト眞魚稚出て來り父上御用にムり升るか」　直「ヲヽ」　○「イヤナニ御出家一子眞魚稚とは是で厶る」　眞「シテ夫なる御出家よ」　大「是なるは石淵の勤操和尚といふ智識今晩當所通行の折から其方高山の岑にあつて千尋の谷に身を投たるに天女降つて助けしと正しく見しとてお立寄りお身には覺えがあるか何うじや」　眞「サア夫よ」　大「何か願ひのあるなれば父母にねがふて遣わせば包まず申せ眞魚稚丸」　眞「ハヽア伯父君のお尋ねに預り申せば父母のお目を掠めし倫盜の諦を犯すに似て佛罰の程も怕ろしけれども如何にも覺えが厶り升る」　三人「何と申すぞ」　眞「豫てより父母には此身の望みも時節あらんと許されぬを本意のウ思ふ此年月夢に八葉の蓮花に座し佛菩薩に見みゆる事一ト夜として變る事なし依て我生死を以て望みの成否を定めんと岑より谷へ飛入りしに如何なる者にや助けられ元の峯へ戻りしは望みのかなふ奇瑞かと心嬉しく立歸りしがお目を掠めし不孝の罪はお免しなされて下さりませ」　豐「スリヤ左程に迄して出家をば」　眞「唯此上のお願ひには佛の御弟子となしてたべ眞魚稚お願ひ申升る」　勘「誠に今宵の不思議といひ今亦夢想の容

子を聞くに全く佛の化身にて御身等が子と生れ衆生を助けに來ませしならん」　大「一子出家なす時は九族天に生ずとあれば願ひをかなへて遣わされよ」　直「實は今日唯今迄出家を止め申べく思ひしあれど不思議の奇瑞佛因深き眞魚椎が出生の昔を申せば或夜の夢に尊き聖是なる妻が懷中に入りしと見たるは夫婦かわらず」　豐「其月より唯ならぬ身となつて十月餘り二月を經て寶龜五年庚寅年誕生わりし此眞魚椎」　直「左迄に思ひ詰たる上は今より望みに任すべし」　眞「スリヤ願ひをかなへて下さり升るか有難う存じ升る」

大「父母の免しを受たる上は伯父が好き師を授け得させん」　眞「シテ眞魚椎が」　両人「師と頼むは」　大「則ち是なる勤操和尚當時三論宗の智識にまして世の人明星の化身と尊とむ希くば唯今より師の御弟子と爲し給はるやう大足偏へに頼み存する」　勤「勤操如き不識の僧の弟子と爲すべき稚子ならねど料ちず當國に節を曳きしも佛緣深き因みと思へば今より都へ連歸り佛法修行致さすべし」　眞「夫ぞ此身の多年の望み今皆成就せしと思へば是程の喜こびなし」　了「アリヤモウ雞明師の坊には御發足わつて然るべう存し升る」　大「我も巡見相濟たれば師と同船の仕らん」　直「スリヤモウお立でムり升るか」　豐「我子の願ひ是非もなき事ながら責てム衣類調度なりとも」　眞「ア、イヤ母上今よゝ樹下石上一所不住の身にあれば此儘お暇申升る」　勤「ア、誠に往雪昔山童子半偈の文に身をかへし」　豐「檀特山の悲みも今は此身にさしあたる」　直「我子は末世の凡夫なれども志しのかなひしム」　大「全く佛の化身なる事疑ひもなき種々の奇瑞」　了「今よりしてム彼の山を」　勤「捨身が嶽と號づくべし」　眞「左樣なれば父上母樣」　直「ヲ、隱分共に」　豐「煩わぬやう」　ト皆々向ふへ思入あつて」

直「此對立の表面に」　大「さし昇りたる日輪は」　勤「則ち本地」　皆々「大日如來」　眞「我弘法を○ト對立の前にて合掌するのが木の頭守らせ給へト立身にて對立の日の出を智惡の輪を見たる佛身の見得皆々は禮拜する此摸樣宜しく行列三重にて○拍子　幕

貳幕目

役人替名

一稚兒眞魚稚丸	大和國槇尾寺の場 同方丈火水觀の場 明州沖獨鈷投げの場
二役　後に空海和尚	
船頭小莊治	
一平郡鞆成	一平郡鞆
	一藤の朝臣賀能
	一勤操和尚
	一同宿道正

一稚兒獅子王丸　一同宿李然
後に守敏僧都　一同宿了圓
一稚兒雲定　一同宿信人
一同宿正雲
一仕出し四人
一船頭二人

○本舞臺高二重中央本堂の段階子瓦屋根紫の幕張り正面觀音開き此内角格子御簾の書割大きなる香炉左右腰羽目の瓦燈窓上手山の出し掛け檜の立樹下手茶店椿の大木都て大和國槇尾寺の体爰に仕出し四人床几に腰を懸て居る茶店の婆々立懸り居る此見得双盤にて幕明く

婆々「どなたも豆湯なりと上りませ」　○「豆湯とは結搆じや」　「結搆といへば今日此れ寺に七宗のお坊樣達が集つて大法會があるといふ事じや」　△「夫に就て賭山からお稚兒達の邀り供養があるといふので夥しいお參りじや」　×「婆さんも今日と錢儲けであろうぞい」　婆「お陸で店は繁昌しますが唯お寺に水のないので年寄のいかい迷惑でムり升」　○「ヤレ〳〵夫ゑ困つた事じや」　△「爰で手水遣ふて參ふと思たのに手桶は此通りカラ〳〵でムり升る故是から五丁先迄汲に行かうと思ふて居る處」　婆「なんなら一緒にムりませ」　皆々「さうじや〳〵」　○「一体不自由な」　皆々「お寺ぢやあア」ト皆ゾ橋懸りへ這入ると向ふより平郡の鞆平郡の鞆成出で來り」　鞆成「卒爾ながらチト物が尋ね度はうムる」　鞆「何を尋ねらるゝぞヲ、さういふは舍弟鞆成ではないか」　鞆成「あなた兄者人鞆殿でムつたか」　鞆「ヤレ珍らしや弟鞆成何かの事は彼處へ參つて承わらんト本舞臺に來り其方は幼少より阿刀の宿禰大足殿へ勤學の爲め遣はせし處佐伯直氏殿の所望に依て同家に家來同樣仕ゆるとの事又亡父の主君獅子王丸殿當時南都山階寺の御弟子と成り未だ御剃髮はあらねども行末天晴の名智識となり給わん事疑ひなき實に希世の獅子王殿其若君に傅つきて我は南都に住居なす故兄弟遠く別れ〳〵の奉公なれば永らく音信も聞かざりしに今日無事の對面なし兄も安堵致したわい」　鞆成「其安堵に引替て案じらるゝは姉者人父御在世の其砌り家に仕えし小莊治と密通の科に依り勘當受し其後は御在處迚も相分らず是が兄弟三人共打揃ふての對面なれば嘸喜びも增べきに其甲斐もなき御行衛せめては無事の便りなりとも承りたいものでムる」　鞆「イヤ其妹初藏にも近頃播磨にありと聞はけど父の勘氣を受けたれバ打棄て置たがよいわいシテ其方には何用あつて當國へは」　鞆成「去ればお聞下され主人の若君眞魚稚君今は當寺の住職なる勤操和尚の御弟子と成り今日御剃髮と國許への知らせにつき以來拙者に給仕せよと御両親の仰せを受け遙々當所へ參

つてムる」　甁「スリヤ當寺の稚兒眞魚稚は佐伯殿の一子にてありしよな」　甁成「いかにも」　甁「ハテ知らぬ事とて」　甁成「如何でムり升る」　甁「何を隠さう我仕ゆる獅子王樣と眞魚稚殿とは智德を爭ム不和なる中殊に今日法會に附き當寺へ御越の事なれバどうか口論でも出來ねばよいが」　甁成「何は然れ拙者にも不案内の義にムればどうか若君に甁成參りしとお傳えも下さらぬか」　甁「ヲ、傳えて遣はさう〔ト甁は本堂の内へ這入る跡に甁成思入あつて〕」　甁成「固よりお愼み深き若君なれば氣遣ひなしとも思へども聞ば捨ても措れぬことア、心懸りなことじやなア〔ト向ふより眞魚稚花手桶を提げ珠數を持出て來り〕」　眞魚稚「我本國を出しより凡そ八年の佛道修行今日剃髮を免し給わんとは我身の悅び此上なし片時も早く御佛へ御禮の法施を奉らん〔ト舞臺へ來り〕」　甁成「夫へお越なさるは眞魚稚樣でもムりませぬか」　甁成「然ういふそちは平郡の甁成」　甁成「今日若君御剃髮との御書到來致すと其まゝ給仕せよとの御諚を蒙むり御兩親樣よりの御書持參仕つてムり升る〔ト手紙を出す眞魚稚披き見る事あつて〕」　眞「ハ、ア御恩も送らぬ眞魚椎に出家堅固に得度せよと御慈愛こもる御文章」　甁「尙其外に御口上もムり升れバ」　眞「ヲ、其仰せも承ゝりたし我は御佛へ詣でし上部家に歸れば其方には庫裏に於て暫らく待ちやれ」　甁成「左樣なれば彼れにてお待申すでムり升る〔ト橋懸りへ這入る〕」　眞「父母のお心斯くある上は心に懸る山の端もなし去りながら今手に觸れし父母の御書は穢れ不淨にあらねども今一度手を淨めんと思へども水一滴もわらざる當山幸ひ是に落葉せし檜の葉を以て摺り清めんト地藏經になり檜の落葉にて清めることなし今彼の經を聞くにつけても六道能化の大導師地藏尊の大慈悲に我ゝ遙かに劣るとも衆生を導く大願の果して空しからずんば是なる椿に此木の葉宿り木と爲し給へト檜の葉を椿の檜に打附る是をドロ〳〵やうの風音にて椿の木へ仕掛にて檜の枝出る斯く目前に檜の枝葉舍りしは大願成就と覺えたりチエ忝けない夫につけても當槇尾寺斯る靈地にありながら瑜伽の清水に三蜜の月を淨せし水無き時は此處に詣でる諸人の離義今眞魚椎が試みに加持の功德を顯ゝし見んト上手の岩山に向ひ呪文を唱える岩より水氣立上る是と同時に正面より獅子王ッカ〳〵と出て來り」　獅子王「ハテ心得ぬ絶て水無き槇の尾に今清水の立昇るゝ」　眞「我が行法の德に依り斯くは五行相應せり」　獅「扨は涌水なしたるは」　眞「此眞魚稚加持の功德」　獅「スリヤ當寺のわッぱ眞魚稚とはおことよな」　眞「シテ又左ふ云ふ御邊は何人」　獅「我こそは南都の獅子王」　獅「面會なすは今が初めて」　眞「不思議な緣で」　獅「イヤナニ眞魚稚殿御身か行ひ給ふ處は唯夫しきの不思議でムるか」　眞「イヤ正法に不思議おく我が爲す所ゝ三密の

威德を以て斯の如し」　獅「三密の威德抔と乙事大仰しきは小兒の戯れ獅子王法力を施さんとならば御身の一命立どころに取て見せん」　眞「コハ面白し獅子王殿御身何等の法を以て我一命を斷るゝぞ」　獅「ハテ知れた事軍荼利夜刃の修法を以て」　眞「御邊其法を行ひ給わば我又大威德明王の法を修して妨ぐべし」　獅「ム、御身の行法我に優るか」　眞「御邊の法德我に優るか」　獅「命を賭けて」　両人「勝負を決せん」　二重より平群鞆橋愚より鞆成出て來り　鞆「ア、イヤ暫らく」　鞆成「お止まり」　両人「下さりませう」　獅「誰かと思へば汝は鞆何故あつて」　眞「止むるぞ」　鞆「去ば慈悲忍辱の佛の御弟子にわるまじき御振舞ひ」　鞆成「固より我君の德行優り給へは獅子王どのゝ御一命にもかゝわる事」　鞆「コリヤ舍弟控えぬか雨を呼び雲を起す我君の自在法力に敵對へば眞魚稚どのゝ一命危うし止めにいでしも御身が主人を存ずる會釋」　鞆成「ア、イヤ兄者人眞魚稚樣にも權化の再來獅子王殿の及ばぬ事を知つて止めに出たるは兄者人の御主人故言は拙者が情けといふもの」　鞆「默れ鞆成無禮の一言」　鞆成「イヤ無禮でムらぬ獅子王殿が御身の主なら眞魚稚樣は拙者の主人爭でか主人を辱かしめんや」　鞆「ヤア打棄置けば主人の大事」　勤成「獅子王觀念」　鞆「眞魚稚覺悟」　〔ト双方刀の柄に手をかける正面より勤操同宿四人付添ひ出て來り〕　勤操「爭ひ無用」　四人「ハア、」　勤「双方の爭ひ麁忽なり必らず血氣に逸り給ふな畢竟此場の爭ひも自宗の德を輝かさんとの心体なれば是亦咎むる處に非ず互ひに轉念の行法を試みんとならば五性八不の鉾先に訴へず我方丈にて試し見よ」　鞆「コハ願ふ處の其お御詞」　眞「師のお免しを蒙むる上ノ」　鞆「勤操和尚の面前にて」　鞆成「法德を顯わし給へ」　勤「其勝敗を定むるには吾一物を出して試ひべしイザ同道の〔ト立上り衣の袖を掻き合すが道具替の知らせ〕致すべし〔ト此もやう宜敷合方にて此道具ぶん廻す

○本舞臺平舞臺中央の床の間是に地水火風空と記せし横物の大軸左右張壁上下金襖大欄間を卸し都槇尾寺廣間の体時の太鼓にて道具納まるト上手より李然道正黑染衣同宿の拵らへにて白木の箱と經机を持出て來り　道正「何と李念面白い事が初まつたじやないか」　李然「さいやい常寺の眞魚稚と山階寺の獅子王と互ひに宗旨の德を爭ひ御師匠樣の扱ひで其行法を試ひるとて此函じや此理へ物を入れて當て物さすとの事」　道「サアそこで中へは幸ひ庭の此蜜柑じや〔ト袂より蜜柑を八ッ出す〕」　李「成程此中へ入れて斯う蓋をすれば外から分るか」　道「夫が分る程の行力があるから何んで三十年も味噌摺坊主をして居やうぞい」　李「然し是を用意が調ふたわい」　道「師の坊にはイザお席へ」　両人「お着き遊ばされませう〔ト上手より勤操眞魚稚獅子王鞆と鞆成同宿四人付添ひ出て來り〕」　勤

いかに眞魚稚獅子王どの是なる函に我秘め置し一物あり両人共當て見やれ」　鞆成「イヤナニ若君今日御出家のお手柄初めに」　鞆「他院に於ての事なれバ若君必らず不覺をば」　鞆成「假令如何程仰ッしやるとも眞魚稚樣に爭で及ばん」　「ナニ眞魚稚殿に劣るべき」　鞆成「萬一負なば何んとさッしやる」　鞆「若君勝たば何と致す」　鞆成「拙者が此首進上申さう」　鞆「面白い眞魚稚萬一勝てば此首を」　鞆成「見事お渡し召さるゝか」　鞆「其根押より汝が用心」　勤「アイヤ控へよ兩人早く」　李念「サア勝負と仕勝ち」　道正「此中は」　昔々「何でムる」　獅「則ち數と八ッにて品は確かに無情の物」　道正李然「エ、」　獅「柑子とこそ存じたれ」　李「したり見事コリヤ此勝は」　両人「獅子王殿」　眞「エ、」　李道両人「中は蜜柑に相違ムらぬ」　鞆「なんと弟若君の神通自在恐れ入ったか」　眞「ア、イヤ待れよ鞆殿數はいかにも八ッなれども品と有情の生類でムる」　李「ア、コレ今更なんと云ふたとて」　道「眞魚稚殿」　両人「わかぬわいのウ」　鞆成「アイヤ一應其函改め見たる其上にて」　李「なんの幾ら改めても」　道「論より証據は」　両人「此通りじや」〔ト蓋を取る此内眞魚稚袖の内にて印を結ぶ柑の内より差し金にて蜂入ッ飛び出し道正李然の頭を刺す　李「ア、痛い〳〵コリヤ何うそや現在入れたる八ッの蜜柑」　道「どうして蜂になったのじや」　鞆成「なんと兄者人見られしか品は有情の則ち生類是でも無情の柑子でムるか」　鞆「サア夫と」　鞆成「獅子王殿の及ばぬ事は今分ったで〻ムらうがな」　同宿信入「しかし此蜂はどうか成らぬか」　正宣「坊主天窓が」　同宿皆々「痛いぞ〳〵」　眞「アイヤ何れも眞魚稚確今より毒虫封ぜ込むべきぞ」〔ト呪文を唱ふる是をドロ〳〵に成り蜂は消える〕　獅「ハテ訝かしき此場の當て物今一ト勝負仕らん」　勤「ム、幸ひ是なる軸の文字を一字宛兩人に與へなん」　獅「ハッ地水火風空の内我は火の一字を受べし」　眞「眞魚稚水を取り申さん」　昔々「法力をば〔ト獅子王眼を閉ぢ呪文を唱ふる是を薄ドロに成る掛物の文字仕掛けにて燒け水の一字殘り左右の壁金襖とも火焔の書割にかはり奈落より一面に煙りを吹上げる〕　獅「いかに眞魚稚我行法の至れる處今ぞ思ひ知ったるか」　眞「愚かや獅子王汝我に及ばぬ事軸に殘りし一字を見よ」　獅「なんと」　眞「我取る水には敵し難し」　獅「ヤア汝左程の行力わらば此火を防ぐ奇特を見せよ」　眞「云ふにや及ぶ〔ト眼を閉ぢ呪文を唱ふる是にて舞臺前より水氣一面に立昇り東西の膝隠しを打返し涙の張物に替る〕　鞆「ヤ、瞬くひまに室内一面緑の波と相變じ」　鞆成「水漫々たる奇瑞は目前」　眞「いかに獅子王汝我法力に勝れしものゝ為ら火を以て此水を防ぎて見よ」　獅「サア夫は」　眞「まだ此上にも爭そうや」　両人「サア〳〵〳〵」　眞「お師匠如何にムり升る」　勤「誠に汝一念の觀

解凝らせし甲斐あつて浩かる奇瑞を見る上は誰か其德を爭わんや〔ト是にて浪音烈しく舞臺前花道へ浪手摺をセリ上げる〕　李「ヤ、コリヤ茲迄水が」　宮々「押て來た」　獅「モウ此上は」　甲「主人の恥辱を」　頓成「其手を待うや」　勳「卒爾致すな」　真「目に物見せん〔ト呪文を唱ふる是より双方立廻り乾度見得一セイ波の音にて浪幕をふり冠せる

○本舞臺一面の浪幕一セイ浪の音にて道具納まるト上下手より道正李然裾を尻迄捲くり龍頭の付し天蓋の幟棹を杖におし出て來り　両人「深いぞ〳〵」　道「チ、其處へ來たのは李然でないか」　李「如何にも李然じやがあの眞魚稚の此槇の尾を一面の水にさらして師の坊初め皆一同押流されたに違いないコリヤ助け船でも渡ふて來ずはなるまいわい」

道「チット待たり其助け船と跡へ廻して愛が出家の極樂じや」　李「ナニ出家の極樂とは」

道「サア常には喰れぬ魚なれど是程の水なれば魚の居ぬ事もあるまい師匠の行衛の知れぬ間鯨でも摑まへて喫わうではわるまいか」　李「したが其樣手が屆くか」　道「チット夫には此道正マヅ貴樣の脊中に斯う負われ此幟棹で挾み揚るとゑ何うぢや」　李「まるで書に書た手長島じや」　道「サアしめた〔ト龍頭の先に魚盤の紐を引懸け上げる〕　李「なんじやコリヤ魚盤ぢやわい」　道「エ、忌々敷い」　李「モウ〳〵魚よりお師匠樣の蛸入道を尋ねようではわるまひか」　道「夫がよい〳〵〔ト向ふへ這入ると上手より信入棺の角棒に股がり是を正雲雲定の二人擔ぎ出て來り〕　三人「深いぞ〳〵」　信人「斯うした處は頓と穴明島といふものじやが一体我等は此水で唐土へでも押流されたのではあるまいかな」　正雲「サア何とも言れぬわい」　信「早く山へ逃たり〳〵」　両人「チット合点ぢや深いぞ〳〵〔ト信入をかづいで向ふへ這入る是より床の淨瑠璃に成る〕　上るり「立騷ぐ抑も眞言和朝の高祖弘法大師と聞えしは讃州多度の浦に生れまし〳〵て法りの誉は空海和尚登壇散花の御名をば遍照金剛と申し既に延暦末の御年求法の爲に入唐し惠果和尚に授りし眞言秘密の敎えをバ吾日の本に弘めんと明州の津を船出せし歸朝の波も御夢を結び給ひし靜けさは法の德とぞ導みける』ト是を大ドロ〳〵に成り心といふ字を空へ引上げ知らせにつき浪幕を切て落す

○本舞臺一面の唐やうの御座船左右瓦燈窓向ふ唐土の山を見たる海原の遠見花道際に大きある岩臺都て唐土明州沖の摸樣船の上に空海若き僧の拵らえにて經机に凭たれ居眠り居る此摸樣宜しく右の鳴物にて道具納まる「ト空海夢の覺たるこなし」　空海「扨は今の之夢でありしか吾眞魚稚の昔勤操和尚の弟子と成り二十歳にて出家を遂げ散海如空と名を名乘り戒檀院に登りてより文空海と相改め佛道修行に心を委ね大日經を得ると雖も其理分明おち

ざる故求法の爲に入唐なし青龍寺の惠果和尙を師となして眞言の密經梵字を悉く三ヶ年に學び得て歸朝を急ぐ海原も靜けき儘にウッ〳〵と眠りの間に見し夢は山海寺の守敏僧都未だ獅子王と曰ひし頃槇の尾の御寺に於て渠と諍ひ水論觀の奇瑞を見せしを今まさ〳〵と夢めみしは此年月の難行苦行に神心勞れしものならん思へば心羞かしゝ」上『心に愧ぢておわします折柄船中騷がしく平郡の鞆成走り出』　鞆成「御主人一大事に厶り升る」上『と顏色變つて見えけれど空海更に動じ給わず』　空「何事なるぞ」　鞆「されば何者の仕業にや船底三ヶ所切破り水主櫂取り防げ共水の入事夥く今にも此船沈まん事疑がひなし早く此船明州沖へ戻しわつて然るべう存ぜ升る」上『言ふ間も吐息つくばかり空海笑みを含ませ給ひ』

空「我日の本の智識とも言るゝ守敏僧都に似氣なき振舞必ちず驚ぐな驚くな」上『未然を察せし御一言鞆成不審の眉に皺』　鞆「何守敏僧都の振舞とも」　空「我在唐の其間にも度〳〵覘ひし者あれど堅く封じて入る事を免さず依て歸朝の船路をば待得て害をなすと見たり遮莫われ我是より水を避ぐべき修法をなさん」上『れ居間にてそは入り給ふ跡に鞆成心もそゞろ』　鞆「君に如何なる法術ありとも如何にして此船中を遁れ出べきア、是といふも皆守敏めが爲せる業思へば憎き賣僧よやあア」上『拳を握り齒を嚙みしめ心あせれど詮方も時に漂ふる海中より顯れ出し山田小莊治（ト花道の切穴より小莊治船頭の拵ちへにて懷劍を咥ひて出て來り岩に取つき　上『巖を足場に船中へヒラリと飛込む飛鳥の早業スワ曲者と支ゆる鞆成』　鞆「扨こそ曲者何れへ參る」　小莊治「空海に恨あつて船底を切り拔き溺れさせんと思ひしに事成らざる心外さ此上は只一ト討其處おッぴらいて通し居らうぞ」

鞆「扨は守敏が荷擔人覺悟致せ」　小「何を小癪な」上『切尖き鋭どく突込む懷劍ヒラリと外して受止むる血氣の若者支ゆる忠臣際を伺ひ空海の居間へハッシと打込む懷劍南無三寶と驚く鞆成ためらう間に海中へヒラリと飛込む早業にパッと立たる汐煙鞆成無念の齒嚙をなし』　鞆「チエ、殘念や又もや曲者入水なせば御船に害をさなんも知れずイデ曲者を」上『と續いて入らんと爲す折柄船中に聲あつて』　賀「ヤレ待れよ平郡鞆成船中には悪なし」上『と押止め立出給ふ藤の賀能こなたは見るより差寄つて』　鞆「ナニ船中に悪なしとは」　賀「されバ不思議や船中に入りし潮乙悉く元に戻り破損の箇所は貝ども集り忽ちに穴を塞ぎしは奇靈なる事には非ざるや」　鞆「スリヤ御修法の威德に依て海底の貝ども集り御難を救ひしものなるかシテ今投たる懷劍乙」　賀「佛再來の空海の御身に何ど悪あらんシテ曲者は」　鞆「必定守敏が一味ならん然し主人の御身に悪なく船中穏かに相成しも偏へに修法の功力ならん」　賀「ハ、ア實に權化の名智識抑も入唐の初めより遣唐使として三ヶ年我在留なせる中奇特は擧げて數え難し」　鞆「今又斯る奇瑞を見るも全く善神應

護のしるし」　両人「チエ、忝けなし」上『實に有難き權者ぞと喜こび限りなかりけり空海御座を立出給ひ東に向へて御誦念あり』　空海「我願望空しからず傳授かり奉る大法眞言諸尊の密經流布相應の勝地あらば是なる三鈷我より先きに日の本に飛行て梢に懸まて吾を待て」上『虛空遙かに投げ給へば時に不思議や件の獨鈷雲にあらわれ見るが間に日本の方へ飛び去りし權化の奇特ぞ仰ぐべし』　賀「アレ見よ鞆成三鈷遙かに虛空をかけり」　鞆成「尊命に隨ふは是も偏に三密の加持の威德と覺ゆたり」　賀「此上は片時も早く」　両人「御歸朝あつて」　空「三鈷の行衛を尋ぬべし」上『御身繕ひの其折柄』ト後ろより船頭三人合口を持伺ひ出て來り」　船頭両人「空海覺悟」上『觀念せよと切込めば呪法の威力にたぢ〳〵五体すくんで動かれず』　賀鞆「是は」　空「守敏我を害せんと斯く迄根强く計りしも眞言秘密の呪法を以て」　賀「兩人共に五体すくみ」　鞆「自由の働き」　両人「成らざるは」　空「是ぞ不動の金縛り」上『奇特を顯はす靈驗の跡白波と』ト空海此上るりの内に印を解くこなし是にて両人の船頭平舞臺へ返り込むのが木の頭賀能鞆成海面を見込む此見得三重一セイ涙の音を冠せ此仕組宜しく幕

三幕目　播州舞子濱邊の場　右衛門三郎鉄鉢割の場

役人替名

一奥方　綾子　一空海　和尚　一守敏　僧都
一賀川中將　照主　一平群　鞆成　一小莊治の女房初藻
一侍女　小櫻　一下部宅郎　一老女　末枝
一染塚の國見　一賀川の太夫雲速　一下男　鎌六
一乳人　虎枝　一下部運内　一下部風平
一侍女　櫻戸　一侍女　楓虫　一小莊治の一子莊吾
一同　呉竹　一右衛門三郎　一同　梅の井

○本舞臺平舞臺上手暖簾をかけし料理店の出し掛け向ふ淺黄幕此前四ツ目垣山吹芽出し櫻櫻の植込み櫻の釣枝都て播州舞子の濱の摸樣爰に運内風平宅郎旅形り下部の拵らへにて腰元四人を捕らえて居る鉄打の乘物を置きあり此見得賑やかなる鳴物にて幕明く　腰元四人「アレてんがうをさしやんすないなア」　宅郎「ナニてんがうするものか今度殿樣が人丸樣へ御參詣とあつて都から見物がてらの保養の旅身分に高下はあるにもせよ慰みには變りはねへ」　運内「然うだ〳〵娯しみなくてゝ動らぬ同じ流れの渡り奉公そこで奥樣へ吹かけて一猪口初めた御酒宴だ」　風平「マア一ッ受てもらわゝ」　松虫「イヱ私等は御酒といふては堅いお舘の御奉公」　梅の井「何うぞ許して」　四人「下さんせいなア」　宅「イヤ柔

かいお館だから一杯飲でも宜いといふのだ」　運「柔らかひお館とは」　宅「其凶様にと面白い事があるのだが」　松「其面白い事とは何ういふ譯かちやッと聞しと」　細人「下さんせいなア」　C「聞たくば極内々の話し故すつとこッちへ」〔ト是にて腰元は左右より宅郎の傍へ寄る〕　腰元皆々「アレ何を仕やしやんすぞいなア」〔ト此時上手より虎枝奥女中の拵らへ綾子片頬に痣のある若き奥方の拵らへにて女小姓に手を取られ出て來る〕　虎枝「是はしたりチトたしなまぬかいのウ」　奥「あなたは奥様虎枝殿にも」　皆々「思ひがけない」　虎「見れば男の傍へ寄り」　櫻「イエ〳〵是は宅郎殿が」　虎「サア是からは不義の詮議をせにやならぬ」　綾子「アヽコレ虎枝いわば保養の旅すがら舘の格と置やいのウ」　虎「夫があなたの御油斷と申ものサア皆の者夫へ出や」　綾「コレ乳母が彼の様に云ふ程にそなた衆はあちらへ行きや」　松「ハイ有難う厶り升る」　奥「奥様御免」　四人「あそばしませ〔ト下部腰元女小姓は上手へ這入る〕　虎「コレそなたは能うも女中を捉えて〔ト宅郎の胸倉を把る〕　綾「アーコレ虎枝モウ許してやりやれのウ」　虎「奥様のお詞故放してはやり升せうがサア柔かいお舘といふた其譯を言やいのウ」　宅「其譯と申升るは何うも是と奥様の御前でと」　綾「ナニ妾が前で言れぬとと」　宅「殿様に知れ升と首でも切られねバ成りませぬ」　虎「何で又そなたの首を」　宅「サア切られるといふ譯とアノ殿様には腰元の小櫻と」綾「エヽ」　宅「深い中でいられ升る」　虎「深い中で夫で濟むか〔ト又胸倉を取て早う譯を言やいのウ」　宅「サア夫もいつ頃からかは存じませぬが夫で柔かいと申升た」　虎「道理こそ殿様には可笑しい素振と思ふて居たモシ奥様あなた仰つしやらねばなりませぬ」　綾「何のまア人丹ならぬ片輪者産れ外に増す花から不してなんと此身が臥戸の壁を攘わりやうどいなア」　虎「サア夫も殿様にと元のお身分を考がへたら」　綾「是はしたり夫を言ば我夫のお身の恥是も殿御の常じやわいなア」　宅「ヘエヽ常の事とは」　虎「コリヤ好い事を聞たわいなアサア宅郎さんふんせいなア」　宅「コレサ奥様の見られる前で」　虎「現在殿御を寝取られても差障ひのない奥様なんの不義の密通のと仰つしやりそうな筈がない」　宅「然う表向にやられては堪らねヘ」　虎「今日は世間晴ての娯しみサア來やしやんせハイ奥様御免あそばしませ〔ト上手へ這入る〕　綾「始めて聞し我君の思ひもよらぬ振舞トハ言へ此マア醜い身に添ふてさへ下さらば何の嫉ましう思はうどいのウ〔ト向ふより賀川照主公家の拵らへ小櫻腰元の拵らへにて太刀を持出て來り〕　照主「そちが酌にて强つう酩酊致したわい」　小「アレ其様な事おッしやつてモシ奥様がお聞遊ばし升たら何となされ升る」　照「ハテ奥と奥そちとそちとや」　小「アレ奥様がわれにお越遊ばし升る」　照「ナニ奥が濱の眺めは格別な事では

ある〔ト舞臺へ來り〕　照「ナ、奥夫に居やつたか國にも和歌の名所はあれど此舞子は一入の眺めである併し早日も西に傾けば舍りを急がずは相成るまい供の者は何れへ參つた」

小「是へお呼び申升る」　綾「ア、イヤ其供の居らぬ内チト折入てお願の義がムり升る」

照「隔てのなき夫婦が中シテ願ひとは」　綾「サア夫婦とは言ひながら醜き妾わに連添ひ給ふお物憂さを御推量申につけ御意にかなひし女共をお妾ともおして御寵愛をば」

照「ア、コレ何故左樣な事を申す今更改めいふにあらねど我父は照俊とて瀧口の武官なりしが故わつて勅勘を蒙ひり紀州名艸の鄕へ移されて浪々の身おりしが賀川の家の聟に望まれ國の守と敬わるゝも皆おことが蔭おらでかゝる立身致すべきや然れば妻とは曰ひながら我爲には大恩人何を不足に餘の花をや眺むべき」　綾「其仰せはお嬉しうは存じ升れど我身に愧ずお見染申せし煩ひを夫と覺つてお果なされし父上樣がわたをばお迎ひ申て此身の願ひをば叶へなされて下さり升たも片輪な子程不便の增す親のお慈悲で三年此方添伏を忝うせし自らが今のお願ひ家の跡取りを儲ける爲と思召しコレ小櫻そなたも勸めてたもいのウ」　照「仮令妻が何と言はふと舅君の位牌へ濟べきか併しおことは何れにか妾となしたき者にても」　綾「ハイ」　照「シテそちが勸むるは」　小「どこの女でムり升る」

綾「そなたじやわなア」　両人「エ、」　綾「主に仕へて陰げ日向おき忠義者」　照「此小櫻を予が妾に」　小「本間の事でムり升かいなア」　綾「何の妾わが爲りを」　照「流石ム綾子おことが勸めいかにも承知致したさうして小櫻そなたに否やはあるまいのウ」

小「此樣な不束か者御辞退申す筈なれど○嬉しうれ受け致し升る」　綾「夫にて此身も此樣な嬉しい事はムりませぬわいなア」　照「口では左樣に申せども嫉みそねみは婦人の病ひ」　綾「何のマア妾わに嫉みがある程ならお勸め申しは致しませぬ夫を憂ひと思召さば肌身放さぬ此過去帳是こそは御先祖始め亡き父母の御戒名若しも此身に嫉み心のあるならば御先祖代々父母をも地獄へ落す例しもあれば」　照「ム、其誓言を聞く上は」　小「足わぬながら」　綾「互ひに中好う〔ト時の鐘に成り〕」　照「アリヤモウ暮七ツ小櫻供揃れ致せ」　綾「夫は妾が申升ませうそなたは茲で殿樣の」　小「エ、」　綾「御機嫌でも取りやいのウ〔ト上手へ這入る〕」　小「奥樣何にも申升せぬ此身の爲にム出雲の神樣モシ殿樣此身の願ひがかなひましたわいなア」　照「是ムしたり少しは彼が手前も遠慮」　小「夫ム然うでも綾子樣の見ぬ間は」　照「少し位は〔ト氣味合ひあるのが道具替りの知らせ苦しうないわい」ト此摸樣宜しく浮たる唄にて此道具ぶん廻す

○本舞臺平舞臺後ろ淺黄幕後に切て落すと向ふ淡路島を見たる海面の遠見松の立樹上下手

山の出しかけ舞臺前涙板松の釣枝都て舞子濱邊の体爰に末枝癪になやみ居る初藻世話女房の拵らへ莊吾子役にて介抱して居る米屋北六藥屋清八立懸ケ居る此見得波の音にて道具納まる　初藻「マア〳〵お靜かになされて下さりませ姑御の癪が重つてゝ困り升わいなア」

藥屋「イヤ三年跡からの長煩らひ續いて貸た藥代三文もおこさぬ爵夫で今に治らぬのゝやた米代ゝや今日は殘らず算用して」　両人「貰ひませうわい」　初「其御立腹は御尤もではムり升るが」　末枝「悴が歸り升るまで」　初「お待なされて」　両人「下さりませ」

藥「いやじやわい家出してから便りをせぬ小莊治」　米「生て居るやら死だやら寧そ二人の着物なと」　藥「イヤ二人を裸にした處が垢染たる襤れ着物迚もの事に此奴等の家の破れ疊破れ障子鍋釜ゝ勿論屋財家財引上げて來ふじやムりませぬか」　米「コリヤ至極妙計」　藥「待てと止るは」　米「算用するか」　両人「サア夫は」　四人「サア〳〵〳〵」　両人「エ、放しやアがれ」ト突飛して向ふへ走り這入る末枝は癪の差込ひこなし初藻は両人を留やうと跡を追かけ行んとして姑を介抱する此間莊吾は下手へ這入る両人は是に心附ず」　初「母樣お心が付き升たかいなア」　末「モウよい〳〵癪は治り升たわいのウ」　初「御持病とはいひながら今日は取り分け掛取衆ゝ爲め

強い御癪氣能うまア早う治り升たしたが納まらぬは今のお二人り」　末「細き烟の竈さへ人手に取られて明日からゝ」　初「疊建具も嵐吹く」　末「雨露を凌ぐ舍りさへ」　初「家根傾きて洩る月の」　末「月の名所の播磨潟」　初「世にある人の娛しみも」　末「夫には引替へ餓鬼道の」　初「呵責にまさる貧の惱み」　末「嫁女」　初「母樣」　両人「味氣なき世の中ぢやなア」ト向ふより右衛門三郎鉄の棒をつき賀川太夫雲速同じ拵らへ深塚の國見下男鎌六両掛を擔ぎ子役莊吾の首筋を捉らえ出て直に舞臺へ來る」　初「コリヤ此子をゝ何うなされ升るぞいなア」　莊吾「コレかゝさまお詫して下さいのウ」　國見「スリヤ是なる小兒は其方の悴なるか」　初「ハイ左樣でムり升る何が鹿相かは存じませぬが年端もゆかぬ子供の事故」　三郎「其小悴めが盜みを働らく親が言附に相違あるまい」　末「ナニ此孫が」　初「盜みせしとは」　雲速「何を奪われしぞ」　鎌六「今茶店にてこちの旦那が内々印籠をお目に懸けたでムりませうがな」　國見「いかにも夫ゝ主人雲速公が豫てより頼み置れし南蠻秘法の儘か毒藥」　雲速「ア、コリヤ」　鎌六「サア其印籠をば床几の上にお置なされたを此小悴めが手の内吳よと附け纏う内見ゐずなりしは正しく仕業に相違ムり升せぬ」　初「ア、モシ親子とも袖乞は致し升れど人樣の者掠めるやうな者でゝムり升せぬどうぞ」　初「外を御詮義をば」　三「エ、だまり居ふう身柄は遠國の郷士な

れども國の守にも等しき某サア其小悴が懐中を改めくりやう」　初「イエ〳〵御乞すれども大事の子コレ莊吾そなた其樣な物を隱した覺えがあるか」　末「念の爲め裸になつて見せやいのウ」　莊「イエ〳〵裸になるのと嫌じや〳〵」　初「是はしたり裸になるが嫌なら母に一寸懐ころを〔ト懐中に手を入れ印籠を取り出し〕「ヤア此品は」　鎌「且那樣の所持の印籠」　末「そんなら孫が」　莊「堪忍して下さりませ」　雲「誠にあれこそ汝の印籠」　三「何と太々しい奴でゑムらぬか〔ト上手より下部風平軍内出て來り〕　運内「殿樣には唯今須磨へお立でムり升れば」　風平「急ぎお迎ひに參れとの仰せにムり升る」　雲「ナニ照主には須磨の泊りへ立越しとなイヤナニ右衛門三郎何を申も旅中の義なれば何れ是なる國見をば遣わす間其節萬事聞てくりやれ」　三「左樣ムちば雲速樣」　雲「サア參れ〔ト雲速國見下部付添ひ上手へ這入る〕」　鎌「シテこやつめは何うなされ升る」　三「子に盜をさせながら隱し立する乞食女ナニ此分で捨置くや〔ト初瀬子役を捕て引伏せ〕」　初「コレ爰な不孝者めが如何に貧苦に迫ればとて大膽な事何で仕やつた子に言ひ附てと疑ひ受しも己れもヘエ、口惜しい面目ない」　末「ア、コレ嫁女手荒い事をしてたもんな大方是は手玩びと思ムての事であろう」　莊「コレ婆々樣お前が癇で苦しましやるのでわしや藥と聞て盜みました」　初「そんなら婆々樣のお癇氣を」　末「見樣て盜みをしやつたかコレ嫁女何の因果で浮世に生存らへ嫁や孫に此苦勞をさすぞいのウ」　三「ヤアうぬ等涙で濟そうとて慈悲や情けは產れて此方夢にさへ見ぬ右衛門三郎此鉄杖くらわせねば腹が癒ぬサア其小悴是へ出せ〔ト上手より綾子二タ役空海網代笠を冠り出て來り〕　空海「ア、イヤ先づ待たれよ」　三「ヤア薄汚なき乞食坊主」　鎌「扨はおのれも相ずりじやな」　空「イヤ愚僧と空海といへる旅の沙門聞けば慈れな此塲の樣子打たてかなわぬ事なれば小兒に代つて我を打て」　三「ナ、望みとあらばくらわし呉れう」　初「ア、モシ何斟もない御出家樣我子に代る此母をサア撲て下さりませ」　末「イヤ孫が仕業も此婆々故どうぞ婆々めを一ト思ひに」　莊「イエ〳〵私をたゝいて下さりませ」　空「イヤ人を數ムは出家の役早々打て空海を打て」　三「飽まで憎くき乞食坊主め子供は我も八人あり其子供等も見懲りするやう數ゑ八ツト定め置き親が仕置ゑ坊主の手本一ッ二ッ三ッ四ッ〔ト七ッまで打つ〕　初「コリヤまアわんまり」　空「願ぐまひ人々よ釋迦も阿羅々の苦患あり是も此身の修行ぞや」　三「甚息の根を〔ト打込むを鉄鉢にて受止める鉄鉢仕掛にて八ッに割れ相引にて空へ引上る〕」　鎌「今打毀つ鉄鉢の」　初「數は儘かに八ッに割れ」　末「虛空遥かに」　三人「アレ〳〵〳〵」　三「風も吹ぬに鉄鉢の飛散しは我勇の爲す所鎌六好き旅の憂さ晴しであつたわい〔ト時の鐘に成り〕」　鎌「アイヤモウ暮六ッちとお急

きなされずば成り升まい」　三「ヲヽ、今宵は是非共明石より隠岐へ便般致さにや成らぬ（ト三郎鏃六向ふへ這入る）」　初「御出家様何處もお怪我はムり升せぬか」　末「親子三人が難義をバお助け下されし御禮と何んと申て宜しいやら」　両人「有難う存じ升る」　空「其禮にと及ばぬ事母の病苦を助けて取らせよ」　初「モシ母様お癒はどうでムんすゑへ」　末「其癒は納まって居るけれどこちら故に打撲かれまだ其上に鉄鉢までアヽ濟ぬ事をしたわいのウ（ト此時雨軍に成り平群の鞆竹笠を翳し出て來り空海を見て小隠れする）」　初「折の悪い俄の村雨御出家にと何方迄」　空「我は四國路へ志せども何れを宿と定めし方も不住の身にしゐれば木部家の隅とて苦しからずお志しに任すべし」　初「余ッきつう降らぬ内」　空「併し老母の雨を冒さば病の障り此笠を着て行かれよ」　初「そんならかゝさん仰せに隠ひ」　末「テモお情け深い」　空「イザ同道の致さん（ト此時鞆は拔打に空海を切らんとする空海と振り向く鞆は拔かけたる刀を鞘に収める子役と是に驚く初藻は子役を引よせる空海網代笠を末枝に渡して錫杖をつくのが木の頭靜かなる合方浪音雨車にて此見得よろしく柏子幕

○四　幕　目

船頭小莊治住家の場

役　人　替　名			
一空海和尚	一船人小莊治	一平群の鞆	
一平群鞆成	一小莊治女房初藻	一老女末枝	
一子莊吾	一米屋北六	一藥種屋清八	
一信者四人			

○本舞臺常足の二重見附押入戸棚納戸口破れのある鼠壁上手の障子家体下手落間海原の片遠見茲に漁船一艘あり例もの所藁葺家根の門口都て船人住家の体爰に米屋藥屋立懸り初藻詫びて居る門の外に仕出し四人舷を削り紙に其屑を受けて居る此見得浪の音濱唄にて幕明く　皆々「チンアボキヤベーロシヤノ」　米屋「コレちつと靜かにしてくれやい」　皆々「チンアボキヤベーロシヤノ」　米「去迚も情けない」　清「こちらは何うわつても濟まないのじや〳〵」　皆々「チンアボキヤ（ト内に入り）」　□「こまさん迚は最前から」　皆々「何をぼやいて居なさるのぢや」　初「サア聞て下さんせ知つての通りこちの人と三年跡に出たなりでかゝゝ加へて姑御の長煩ひ米や藥の代の延び〳〵になりましたを御立腹でムり升れば是迄の不義理はお許し下されば此島目をばお持歸り下さりませ」　清「サア此島目を持て歸れが忌々しいなぜと言つしやれ此比流行る疫病に内の嚊と悴めが七八日といふも

のは湯水も通らず如何な藥屋も匙を投て居た所不思議な事が一ッあるわい」　米「夕べ拔乞に來た所が茲の内に坊樣が居やしやつて氣の毒なとでも思ふたる表の船の其小べりに船といふ字を書しやつて此文字は諸病に靈驗あると云ふた詞を聞た故物も試しと船べり削り長煩らひをして居る婆々と爺々とに飲した處コロリと治つた其不思議さ」　藥「こちの病人も然うじやわいそこでれ禮にコレ此通り帳面に棒を引て來た處へ此錢を突付られる故腹か立うか立つまいか」　□「ヤレ〳〵有難い事玄や」　△「其話しを聞傳ゐわし等も戴だきに來たアノ文字×「杢目に透つて消ゐぬのは」　四人「何うした譯じやいのウ」　初「サアアノ御出家は空海樣といふて今度唐土から尊いお經をれ持歸りあそばしてお弘めなさるこ眞言密經といふ御宗旨ぢやげな現在の利益こ今も言ふ通り病氣が治つたお禮にとて澤山なお米島目（ト傍えに積上げし米錢に思入わつてどうか是をお持歸り下さり升せ」　藥「然う聞く上は尙々持て歸られぬ」　米「わしらを初め皆一統」　皆々「改宗を仕升わいの」　初「ヲ、夫こ好いお心がけ眞言を忘れぬやう常にお唱へなされ升せ」　×「何の夫を忘れ升せう」　皆「オンアボキヤベロシヤノ（ト搖懸り這入る」　初「夫の便りが無いといふは若しや悲しい事でもあつたではあるまいか（ト向ふより子殺莊吾平群輒成出て來り

輒成「シテ坊の家は彼れなるか」　莊吾「アイ向ふの家玄やわいなア」　輒成「を〳〵能う

敎ゑてくれたのウ（ト舞臺へ來る初藻見て恟くり爲し）　初「ヤアそなたは輒成」　輒成「先以てお變りもなく重疊に存じ升る」　初「然うして弟何と思ふて」　輒成「イヤ楮者こ其元樣の弟ではムらぬ」　初「なんと言やる」　輒成「元は骨肉兄弟でも此御位牌の手前弟とは申されまひ（ト位牌を出す）　初「此御位牌こ」　輒成「是こそ父の御尊靈」　初「ヱ、」　輒成「其許樣とは不義の相手の山田小莊治是へお出下され若氣の至りと言ひながら主の娘と不義の其科で勘當されし山田小莊治せめては一ッの功をも立て父が位牌へ勘當のわ詫をも致さる可きに左もなく主へ敵對おす條討つて腹を癒さんと尋ねし處是なる小兒の迷子札に印したる名前を知るべに態々と案内させたる平群の輒成イザ小莊治をお渡し下され」　初「ア、イヤ輒成せめて世に亡き父上の御位牌になりとお詫がしたいと夫婦心を苦しめし其甲斐もの う小莊治殿には家出なして生死も知れず主に敵對ふ善もなし」　輒成「イヤ初藻殿是なる短刀覺えがムらう（ト前幕の短刀を出す）　初「ヤアコハ覺えある妾わが所持の守刀夫ト家出の其時に持て退れし此短刀どうしてそなたの」　輒成「手に入つたるは我主人空海和尙勅命に依り入唐なし此度び歸朝の沖中にて船を沈めて害せんとせし曲者あり是皆守敏僧都が差圖なる事分明なれども其節主人空海和尙に投げたる刃は夫おる短刀」　初「そんなら夫ト小莊治殿こ現世に存らへ空海樣に」　輒成「イヤ子迄なしたる夫婦の

中こなたも同意でムらムがな〔ト初藻短刀取直し咽を突かうとするを止めて〕　鞆成「コリヤ何となさるゝ」　初「何とするとは知れた事守敏僧都は父の御主人其由縁にて荷擔なし空海様に敵對せしかは知らねども第一奥にお出あそバす空海様に此身の言譯に」　鞆成「ヤ合点の行ぬ御身の詞空海様が此家に」　初「料らず親子の難義を救はれお宿申せし空海様」　鞆成「最早一命を捨るに及ばず此上は悪人の小莊治とヨモ連添ひもなさるまい」　初「エヽ」　鞆成「シテ小莊治にと」　初「今に戻つて」　鞆成「參らぬよなシテ又今にも立歸りなバ」　初「篤と實否を糺せし上にて」　鞆成「夫トに隱ひ他人となるか」　初「但しは背むいて兄弟の」　鞆成「縁を結ムか此お位牌」　初「此短刀は妾わが預り」　鞆成「お目にかゝるも兄弟と」　初「いふに言れぬ他人の内儀」　鞆成「お客人様ドレ御案内致し升せう〔ト子役の手を引き両人奥へ這入る是より床の上るりに成る〕　上るり『巡る日のきのふに暮て飛鳥川昔は扶持も食みし身の今と流浪のたつきさえ波乗る舟のすぎはひにいつか其身も馴れ衣三千餘里の唐土へ渡りて送る春秋も既に三とせを故る郷へけふ立歸る山田の小莊治』　小莊治「僅か三年立つ内に變りし故郷の此さまを觀るに就けても悴女房母者人は御無事なか主人の爲と風言ひながら親には不孝の此小莊治ア、義理程つらひものと無いわい〔ト舞臺へ來りテ、幸ひ誰も居ぬ様子マヅ女房に逢ふた上母者人へのお詫の談合」　上『と門の口迄目に夫と伺ふ鞆玖く手も見せず切付るを掻い潜つてしつかと押へ』〔ト此以前下手より平群の鞆伺ひ出て來り切てかゝる〕　小「ヤア何奴なれば詞もかけず卑怯な振舞」　鞆「卑怯とと汝が事辱ハを破り空海をかくまひ置く不屈者」　小「さういふ御身は鞆侯合点の行ぬ其お詞御勘氣御免の蒙むりたさに空海を亡きものにせんと誓ひを立ての艱難然るに空海留家にありとは」　上『不審の眉を顰むれば鞆は猶も居丈高』　鞆「ヤアとぼけるな小莊治汝の安否を聞ん爲守敏僧都の御供なし密かに奈良より立越る途中に於て空海に出遭ひし故窺ひ見れば此家の内に宿したり最早汝が手を假らず奥へ踏込み真ッ二ッ」　上『勢ひ込で立懸るを小莊治愕き押止め』　小「ア、イヤ暫らく空海此家にありと聞しは今初めての拙者が喜び討て曇りの無き潔白を御覽に入ん何卒夫にて御勘氣御免を」　鞆「チ、夫さへ尾首好く仕をはせなば勘當赦免は身共が誓言汝見事に討果すか」　小「御せ迄も候はず」　鞆「併し猶躁と相成らぬぞ」　上『呼き默頭平群の鞆元の芦間に身を忍ぶ小莊治は邊りを見廻し草鞋解く間も母への遺處物書させじと拔き足に内に入る間も女房が行燈片手に見て恟くり』〔ト奥より女房出て〕　初「其處に居るは誰ぢやいなア」　小「サア茲に居るはおれじや」　上『と顔を向れば』　初「

ヤアお前はこちの人小莊治どの」　小「女房今戻つたわい」　初「今戻つたゝ無いものじや親子女房振棄て三とせが間便りもせず夫にてマア何と思ふて」　上「と内入り悪き女房が詞にこなたムッとなし』　小「我家なれば戻りもせうかい」　初「れ前は我が家と思ふてゝムんすかお前のやうな邪見な人とは知らずに添ふたが腹が立つサア今暇狀書て下さんせ」　上『ずッけり言ふ顔打ながめ』　小「暇狀書けコレ女房其立腹も長の年月苦勞をさした故でもあろうが是には段々譯もあり又元を考がへたら然う言れた中でもあるまい」

初「そりやお前が言いでも勘當受て凡そ七年子迄なしたる中なれどお前の邪見な仕方故生て居るのが不思議ぢやわいなア」　小「イヤ困究したが悔しいとて望む暇の狀は書れぬ口では難澁とぬかせども茲に積だる錢と米」　初「エヽ」　小「元から貧苦の中て三年越のあるじの家出嘸や飢に迫りしならんと思ひの外なる此有樣大方是は男が出來暇を呉といふのであろう」　初「ハイ出來ました夫故私しに暇まをば」　小「イヤならぬ亭主の留守の腐り間男刀にかけて了簡ならぬ」　初「成程親や妻子を振捨人を覗ふお前方やもの断りたう思ふは道理じやわいなア」　小「ナニ人を覗ひしとは」　初「是を覺えて居やしやんすか（ト懷劍を出す）」　小「ヤ是は」　初「唐土明州の沖中にて空海樣へ撃つたる懷劍」

小「ヤア」　初「妾しが身にも命にも代られぬ殿御といふは空海樣其大德の智識をば殺さうといふ恐ろしい心に愛憎がつきた故サア暇狀書て下さんせ」　上『在り合ふ硯筆を附られ今は隱すに隱されぬ証據の劍に吐胸をつき』　小「斯る証據のある上は一ト通り聞てくれ夫婦流涙の艱難も全く主君の罰なりと先非を後悔する折柄新樣の仰せには空海と言る賣僧日本に邪宗を弘めんとなす佛敵其方密かに彼の地に渡り空海を討て捨おば親に代つて勘氣を赦さんの御詞三千餘里の海を渉り空海を覘ひしかど遂に事を仕遂げずしてスゴ〳〵戻りし今日唯今聞けば空海此家にありとは天の與え我は面体見識られたれとおこと空海を刺し殺しては呉まいか是皆勘當御免の望みを遂げる爲の夫ト〳〵操」　上『事を分けたる小莊治が賴みは妻の初藻より母は堪らず走り出我子の襟髮捉つて引つけ』　末「アノ愛な大悪人めが」　上『かよわき女も怒りの一心大の男を捻じ倒せば是はと愕く孫女房』　初「コリヤ母樣には何故に」　莊「此伯父樣といさかひさつしやる」、　上『慌り止むれば聲ふるはし』　末「コレ嫁女必らず止めて下さるな孫も此手を放しや是ゝそおたの父じやはいのう」　莊「そんならお前がとゝ樣か嬉しい〳〵」　上『何の頑是も辨まへぬ子の悦びに涙を流し』　末「コレ小莊治聞やつたか己れが樣な悪人でも親と思ふて此歳月せがむで待詫子の成人皆んな嫁女の世話じやぞよ己れが居てさへ貧苦の中年老し母や我子の養育に詮方盡ていぢらしい」　上『晝は人の袖を乞ひ夜は姑の介抱に夜の目も合さぬ憂き艱難○

其貞節な此嫁女が暇まを望むも無理ではないコリヤヤイ彼の空海樣はな孫が難義を其身に代へまだ其上に　上『身貧の者と憐れを給ひ○おのれが留守に捨朽たアノ船に文字を書き爨々が癪氣はいふも更なり多くの人の病ひを治し其禮物にとて此澤山な米島目是程有難い空海樣を殺さんとは鬼と言わふか蛇と言わふか空海樣へ申譯に此母が折鑑思ひ知れ」

上『と打んとする時一ト間より走り出たる平群の鞆成』鞆成「アヽイヤ老母主君空海和尚を海和尚は鞆成樣の御主君とな」　鞆成「いかにも汝が勘氣の後ち主君と頼む空海和尚害せば害せんと爲す山田の小莊治某代つて折鑑せん」上『と言に驚く山田の小莊治』　小「ナニ空んとなす惡事の天罰仕置と父の位牌を以て」　上『觀念せよと小莊治が髻摑んで引倒し骨も碎けよ身も裂けよと力に任す荒氣の折鑑○此上と鞆成が刀の引導授けて呉れん　上『既に斬うよと見えたるを兄の鞆蹶け阻て』　鞆「コリヤ何と致す」　鞆成「さいふこなたは兄者人」　初「鞆殿にはどうして爰へ」　鞆「某參る上からは指でもさヽば許さぬぞ」

鞆成「貴殿搆ひ召るヽからは小莊治を渡唐させたも定めてこなたの差圖でムらう」　鞆「いかにも邪法弘むる空海を討て捨よと言附しは平群の鞆」　鞆成「ヤア邪法とは奇怪なり」

鞆「エヽ汝如きと論は無益サア小莊次親や妻子に心溺れて主の言附け背く所存か」　小「全く以て」　鞆成「我爲にも主君也主に背いて道ならぬ守敏僧都に力を添るか」　小「サア夫は」　末「親に背かば勘當せうか」　鞆成「父に代つて七生迄の緣切らうか」　鞆「我に隨ひ勘當赦免の望みを遂るか」　初「妾しに暇を下さんすか」

皆々「サアヽヽヽ」　鞆「山田小莊治返答聞ん」　上『主と主とが義理詰に追取圍みし親女房何んと詮方途方に暮れ心惑ひし折こそあれ一間の裡に御聲高く』　空海「ヤアヽヽ人々諍そはれな邪法と見做す空海が弘むる法は諸宗の最上卽身成佛疑ひなき其現證を見すべき也」　上『障子をサッと開かせ給へば肉身忽ち金色の盧舍那佛と現れ給ひ光りを放ちて見えたるは有難かりし事共なり人々隨喜の涙を流し』　鞆「ヤヽ空海和尚が肉身變ぜ」

初「御身の裏より光を放ち」　鞆成「アラ尊とや」　三人「有難やなア」　上『嫁も老女も手を合せ禮拜なして敬まひける小莊治眠りの覺たる如く懷劍取るより我腹へグッと計りに突立れば是と驚く嫁初鶴』　初「ヤアかヽさん小莊治殿が腹切らしやつたわいなア」　末「イヤ嫁女歎くまい空海樣の現証利益に後悔しての事ならん血汐の穢れは恐れあり」　上『靜々立て一ト間の障子ハタとさしたる母親の氣丈に鞆氣を呑まれ』　鞆「仔細を申せ」　鞆「コリヤ小莊治切腹なせしは親への義理か」　鞆成「妻子の愛に血迷ひしか」

両人「山田小莊治」　上『言ふに手負ひは息をつき』　小「親や妻子に血迷ひも仕らずあなた方への申譯」　両人「何と申す」　小「唯一心に貴僧を思ひ御

勸氣御免を願ひたさに覘ひし相手は親子の恩人夫と知つて討ときは鞆成樣に不忠と成り討ねばあなたへ義理立ず命一ッをお二人りのお主樣へ言譯に捨ねばならぬ樣になつたも空海樣に敵對せし佛の罰是を手本に鞆樣どうぞ今より空海殿に又向ふ事思ひ止つて下さりませ」　上『主を大事と諫めの言葉苦痛を堪へ一間に向ひ○權化の御身を失わんとせし極重惡人今より何卒是なる悴を御弟子と爲して父が佛果を得させ給へ」　上『死ぬる今端の際迄も子に引さるゝ恩愛の血筋にからむ血の涙○モウ此上と思ひをく事更になし何れもおさらは」　上『キリ、〳〵と引廻し笛のくさりを搔切て其儘そこに倒れ伏すワッと計りに母女房死駭に取附き縋り附き堪ちへし涙一ッ時に咽び歎けば鞆成も共に涙の眼をしば叩き』　鞆成「いかに兄上小莊治が諫めに隨ひ給ひなば彼も佛果を得る道理」　初「迷ひの雲を晴させ給へ」　上『勸めの詞に平郡の鞆今は心の角も折れ』　鞆「其異見もさることながら世に忠義程せつなきものがある可きか推量せよ二人りの者」　上『義を失わぬ一言に姉も舍弟も諫め兼見合す目には涙なり空海一ト間を立出給ひ』　空海「義理を捨ざる鞆が詞凡夫の鉄心健氣なりア、我此家に舍らずばかゝる歎きもわるまじきに」　上『と憐み給ふ慈悲心に老母はいとゞ涙に暮れ』　末「あなたが居ませばこそ善心に立返りし悴が最後も御法の功德」　初「どうぞ此子をあなた樣のれ弟子になされて」　両人「下さりませ」　空「善哉汝一子出家の功德には九族天に生るゝ敎ゑ今より空海が弟子となし名を實惠と與ふべし」　皆々「ハ、有難う厶り升る」　上『悅こぶ中に幼子と父の死骸に取り縋り』　莊「コレ爺さんわしは今から空海樣の御弟子とあつたぞへ」　空「弟子への示しと師の役たり今空海一筆を止どめ置き長く實惠の敎ゑとなさん鞆成夫なる硯を持テ」　上『仰せに鞆成在合ふ硯塵打拂ひ奉れば空海御墨摺り流し傍の柱に筆太々天地合と染させ給へば不思議や裏に拔け透り文字アリ〳〵と拜まれしは權化の奇德ぞ尊とけれ』　鞆「ア、文字柱に染み透り」　鞆成「天地合と」　皆々「現はれしと」　空「いかに實惠承はれ天は父なり地は母なり是に合するもの則子なり汝父母への孝を思わば我密宗の敎を守り破戒の僧となることなかれよしや柱は朽るとも文字末代朽ざる諫め是を洗ふて服すれば萬の病ひ平癒なすべし必ずらず疑ふこと莫れ」　上『示し給ひし御筆は天地合とて末代迄朽ぬ利益ぞ不思議なれ』　鞆成「兄弟互ひに給仕なす主は佛門高德の聖りと聖りに在し〳〵ながら」　鞆成「現世にかゝる苦を受るも」　鞆「過ぐ世いかなる惡緣ぞや」　鞆「弟わしきなき身の」　皆々「上じやなア」　上『互ひに顏を見合せて歎く涙は播磨潟波打つ磯の小夜千鳥啼く音もいとゞ哀れなり空海察し遣り給ひ』　空「人々痛く歎かれな總て世上の有樣は春の夜の夢に似て凡夫の眠を覺すべき曉もありぬべし我と是より四國に渡り佛

場を營まん」　上「と立せ給へば老母押止め」　末「一夜のお宿と申と雖も心にまかせぬ貧家の悲しさ老婆が供養に奉る一ト品あり」　上「と佛壇より取出したる一ッの鉄鉢○妾か夫は行基菩薩の弟子となりしが是なる悴小莊治を連れて別れし其時にいつの年いつの日に菩薩來まして舍るべしと言ひ遺れしを今想へば空海様に相違なし不思議の御緣で正眞の菩薩を拜み奉る婆々が喜び何に譬へん切めて是なる鉄鉢と お禮の爲めの布施の印お受けなされて下さりませ」　上「恭やしく差出せば空海御手に受させ玉ひ」　空「ハ、ア釋尊涅槃の其砌り受けさせ給ひし鉄鉢を行基菩薩の得給ひて御弟子に附屬し給ひしと聞きつる 此鉄鉢よな空海生涯手を放さず行基の跡を慕ふべし」　上「仰せは今に高野山御影堂に現存なす謂れは斯くと知られたり」　甲「まことに佛緣愛に歸し」　空「婆々が望みを果せしも」　甲「思へば不思議の宿緣にて」　空「惡人却つて佛果を得るも」　初「皆密經の御功德」　空「さらば」　皆々「おさらば」　上「今ぞ覺えて播磨潟御法りの德ぞ著るし」ト此樣樣宜しく床の段切にて幕

五幕目　右衛門三郎邸の場　同下男部家の場

役人替名

一右衛門三郎　一下男　與四郎　一娘　露葉

一妻　千種　一下男　鎌　六　一深塚の國見

一百姓　寶作　一百姓　稻助　一同　畔六

○本舞臺平舞臺床の間佛壇是に白木の位牌七ッ列べあり小摸樣の襖上手折廻り塗骨障子家体下手土藏の横手を見せ例もの處家敷門都て在体豪家の摸樣愛に百姓四人容膝に向ひ飯を喰ひ下男與四郎給仕をして居る此見得在郷唄にて幕明く　與四郎「どなたも澤山にかへて下さりませ」　寶作「イヤ〳〵モウ侑めて下さるな」　稻助「氣兼故皆手盛でよばれ升る」　與「サア私もおと〻ひ迄床に就て居りましたが病を押て起て居升も一日一夜に七人迄從弟が急死といふは不思議な事ではムりませぬか」　畔六「夫といふのも高い聲では言れぬが爰の右衛門三郎殿はこなたの爲には伯父なれど父御の死なれた其時に後見として這入り込み家附の息子をばコキ使ふ氣の毒サ」　畑九郎「まだ其上に此家を今に見さぬ强慾の大方罰で」　四人「おろうぞいのウ」　與「ア、モシ私しや時節と諦めて居り升はい」　寶「サア夫が私等は」　四人「いおらしいわいの」〔ト奥より露葉千種出て來る〕　稻「ヤれ前は御寮人」　畔「奥樣にも」　四人「若しや今の樣子をば」　千「イヤ何も聞升せぬが何ぞ言ふて」　畑「ハイ申て居り升たは嘸御愁傷とお悔み申て居り升たシテ御葬式は」　千「

サア何をいふにも夫トの留守ヤア寛くり喫べて下さり升せ」　四人「サアモウ一膳よばれ升せう」ト向ふより右衛門三郎鎌六附添ひ出て來り」　鎌六「モシ旦那樣今彼の山の頂きにおとゝひ割つた坊主の鐵鉢碎げの數さえ八ッまで揃ふてあつたゞ何とマア不思儀な事ではムり升せぬか」　三郎「馬鹿を吐すな播磨で割つた鐵鉢が此伊豫迄飛で來う筈があろうか早く參れ」ト舞臺へ來る」　與「伯父樣御歸國でムり升たか」　千「あなたの戻りを待て居ました娘すゝきを」　三「イヤ水一杯も無駄に使ふは國土の費え見れば村の者共が飯を喰ふてけつかるはどうしたのじや」　四人「皆よばれて居升のじや」　三「是じやに依て身共が留守中三文の費えも立ぬやうにせいといふて置たのに」　與「是はしたり然うきたのうは言ぬもの」　三「おのれ一文の稼ぎも知りをらひで何を云ふぞ米一粒でも大体の事か一年肥せば一粒萬倍十年たてゞ何ぼの米ぞや」　千「然うでもあれどアノ位牌を見て下さんせ」　三「ヲヽ先に立たは俗名太郎其外子供六人の俗名を誌したるは」　與「あなたが留守の其間に」　露「弟三人妹四人」　三「そんなら餓鬼めは皆死んだか」　稻「然もおとゝひの日暮前から」　畑「丁度さのふの暮台迄にお七人とも同じ死に樣」　鎌「ムヽまてよ一昨日播磨の舞子の濱で旅の坊主をくらわした數は七ッで果が鉄鉢コリヤてつきり罰が當つたに違ひは無いヤレ恐ろしや〳〵」　三「何を馬鹿な乞食坊主に何の罰一ッ緒に死むだが結何物入も輕う濟むエヽ、鎌六山續きの麥畑の水溜でも浚えて來い」　鎌「モシ旦那今旅から戻つた計りちつとは休まして下さりませ」　三「旅から戻つたとて飯を喫ずに置くかヤイ與四郎向ふの畦はアリヤ何じや早く往て一ト鍬入れ隨分水に油斷すな」　露「アヽモシとゝさん與四郎さんは病ひ揚句の事なれば」　三「エヽわいらが寄て甘やか故死にも仕居らぬわい」　鎌「こんな家に奉公したが因果と思ふて行ふわい」　三「ヤイ百姓わいらも早ういんで來る年の年貢でもはかつて置け」　賢「ハイ〳〵」　稻「與四郎殿又呵られぬ内わしらと一緒に」　四人「行かうわひ」　與「サア參りませう」ト皆々向ふへ這入る」　千「旦那樣娘も是へおじやいのウ此露葉が十六歳になつたならアノ與四郎と娶合して家を嗣する約束も一年後れてけふが日まで日に增し邪見お使ひやう嘸や兄御が恨むで居やうと思ふにつけ不思議なは子供の死に樣今から心を入替て家も田地も與四郎に讓つて隱居の身となる樣三郎どの聞入れて下さり升せ」　三「ヲヽ娘も喜こむだがよい男を持して遣ろうわい」　露「そんなら與四郎さんと女夫にして下さんすか」　三「ナニあのやうな生智なしに」　千「然うして持たす男といふは」　三「元此國の領主伊豫親王に仕へたる加川照國の伯父雲速殿を」　千「そりや又なんで」　兩人「何ういふ譯で」　三

「今こそ貧窓の身分あれ聽て加川の家の主さすれば身共は國の守の外戚娘も鼻が高いといふもの　壬「いかに出世がしたいとて兄御に義理が濟むかいなア」　三「エヽかのれゲ得心せねばとて此爺親が言ひ附けたら娘は何とする」　壬「アイ妾しや生きては居ぬわいなア」　三「此奴强情な奴じやわい（ト向ふより深塚國元旅形にて供一人をつれ出て來り）國見「コリヤ其方は茶店にて相待居れ」　供「ハヽ（ト引返して這入る國元舞臺へ來り）國「御免下され」　三「チヽ是は國元殿コリヤ娘大切ないお客人お茶なと上げませ」　壬「そんなら是が雲速樣の」　國「いかにも家來國元と申者チト御息女の義に就て」　三「ア、イヤ奥其方と娘をつれて奥へ立て（ト両人を奥に入れ）　三「シテ其節の金子御持參なされたか」　國「金子三百両お手渡し申せし上南蠻秘法の毒藥共に息女を同道せよと仰せで厶る」　三「是は〳〵早速金子の顔が見えて先は祝着お約束の印籠お渡し申す（ト印籠を渡す）　國「シテ露葉殿どやら御得心あらば直樣同道致すで厶らう」　三「いかさま雲速殿のお心急も御尤もなれども露葉は素より女房迄不得心を申じやてサヽ夫といふも拙者が甥與四郎と申者に許嫁せしが今となつて害をなしいかな三郎も性生致して居つたる所」　國「アヽイヤ三郎殿今更得心致さぬとて貴殿に似合ぬまだるい詮義」　三「ハテ拙者が心は（ト呼やく）　國「ムヽそんなら與四郎といふ者を」　三「そやつさへ打て捨れは自然と得心致すは必定」　國「流石は右衛門三郎殿（ト露葉茶を持出て來り容子を立聞き居て）　露「テモ恐ろしい（ト思わず盆を落す）　國「ヤこなたは娘御」　三「麁相者め（ト刀を杖に立懸るのを道具替りの知らせ此樣樣宜敷此道具ぶん廻す

○本舞臺二間常足の二重見附破れ障子左右鼠壁上手牛部家下手竹藪いつもの處丸木柱の實戸都て右衛門三郎内下部々家の体時の鐘にて道具納まるト床の上るりに成り　上るり「粟麥も賑はひ増る伊豫國温泉郡に名も高き右衛門三郎が一ト構ひ家は豐かに富むなれど客嗇爪に火を燈す油火さへも儉約の部家〳〵暗き夕暮の最や詫しく見えにける憂きことの身に積つたる與四郎が病ひ揚句の荒業に勞れ果たる肩に鍬擔げて戻る足さへも力なく〳〵立休らひ」　與「身の憂きことを思ひ廻せバ病で死たが増しならんじやものドレ亦帰つて呵られませう」　上「暫しも心安まらぬ伯父に氣兼の與四郎が戻り遲しと娘の露葉出迎ひ頭に顔見合せ」　露「與四郎さん戻つて厶んしたかいなア」　與「チヽ露葉殿何と思ふて今比部家へ」　露「サアとゝさんのお目を忍ひでやう〳〵と逢ひに來升たは私しや一世一度の頼みじや程におまへの側に何うぞ置て下さんせ」　與「イヤモウ甲斐性の無い與四郎故一生牛馬同樣に責め使はるゝ奉公人と諦めて居る程に許嫁の約束は無い昔と諦めて長者の聟でもあつたなら夫と連れ添ひ親の心に背かぬやうにするのが孝行」　露「私しや世界にお

前より外に殿御は無いわいなア」　與「其志は嬉しいが此與四郎と病氣にて死むだと思へば濟はいの」　露「成程然うでムんす人は老少不定とやらモシ與四郎さん私しが今にでも死だならお前と外の好いお御内義さんを持でムんせうが夫を思へばわたしや黄泉の障りじやわいなア」　與「仮令添れぬ縁じや迚親が定めし妹脊の中わしや生涯獨身で暮すわい」

露「そんなら私しが死だ迚」　與「ハテ今にでも死ぬやうに」　露「サア夫も人の壽命故」　上『夫と言ぬど他所ながら死ぬる覺悟の言の葉も與四郎更に心附ず』　與「又しても忌敷ひ事ばッかり仮令邪見でも親と親腹立さすは不孝故早く與へ行ッしやれ私は何處迄も奉公人玄やと思ふて居て下されいのウ」　露「お前が然ういふ心なら私しも今から主と思ふて言ひ附る用事がわる是から裏の山へ往て夜の明る迄猪小屋の番をしたがよいわいなア」　與「成程夫と役なれど今夜はどうやら差し込みの萌しがわるゆへ休みたい」

露「たった今奉公人と思へといふて置ながら主の云ふこと聞ぬけ爺さんに告るぞへ」　與「夫を伯父さんに言れては」　露「サア夫か恐ろしくは早う往たがよいわいなア」　上『俄にかわる慳貪の詞に與四郎是非もなく』　與「行たうはなけれどもさういふ事なら死でも私は行わいの」　露「其瀧を知りなから邪見にいふもお前のお身に」　與「エ、」　露「イエサ身を粉に碎くもお前の勤め必らず今宵一ト夜さは戻る事はならぬぞへ」　與「寧そ癩で死むだら結句ましでおろうわい」　上『涙ながらに脱ぎ捨し草鞋を又も薄命の身を悔みつゝ下り立ば』　露「與四郎さん今端の際にモ一度顔を」　與「エ、」　露「どうぞ此後を身大事に煩わぬやうにして下さんせエ」　與「合点のゆかぬ今夜の容子若しや何ぞの」　露「エ、モウ早う往かしやんせいなア」　上『常に變りし露葉が素振不審ながらも與四郎は結の惱みを押へつゝ猪小家さして出て行く露葉跡に咽び入り』　露「與四郎さん嫌や邪見な私しとも思ふてゞムんせうかお前を今宵殺さうと爺さんの照だくみ所詮此世で添れぬからとお前に代て死ぬる覺悟未來は必らず女夫でムんすぞへ覗言さへもエ、せずに死で行く身の心の裡推量して下さんせいなア」　上『推量してと娘氣のしども涙に燈火の許に泣伏し入る月も山の端近く鳴る鐘の折こそよしと右衛門三郎裏から忍ぶ竹藪や物音させじと抜足に伺夜るの庭傳ひ「ト右衛門三郎竹藪押分け橋懸りより國元出て來り」　國「三郎殿か」　三「コレ最前貴殿と約せし如く與四郎さへ斬て捨なば否とも親の言附に踏ふは知れた事」　與「然らば拙者と船の用意を仕らん左樣ムらば三郎殿」三「コレ密かに〈」　上『喋し合して深塚國元濱邊をさして走り行く内には露葉が扨こそと伺ひ聞とも知らばこそ跡打視やり笑みの眉』　三「船さへ用意調へば今宵の間に娘を送り雲速殿より又の恩賞」　上『と默頭を合す薬沓の森た刃のだんびら鋭どくも慈に迷ひし片闇の外と内なる

燭し火を吹消し〳〵差し足に入るや入るさの月代も傾むく蓮の其身とも知らぬ因果の探る手に障る屏風の裡こそとグッとばかりに貫ぬきし急所の痛手にばッたばたアッと魂切る一ト聲と覺悟あがらも娘の露葉死あバ兄弟諸共と奥を目がけて入りければ遁さじものをと三郎と跡を慕ふて追て行く』ト三重にて此道具ぶん廻す

○本舞臺元の道具に戻る茲に角行燈点しあり三郎上手に刀を振上げ女房千種是を止めて居る下手に露葉苦痛の体此見得床の送り返しにて道具納まる　上『走り入る一ト間の内は燈し火のわけを奪ひし露葉が深手妻と見るより押明ひ』　千「何科あつて娘をばお前は手にかけ殺すのとやぞいなア」　上『妻が歎きに三郎は始めて夫と見て悔くり』　三「ヤ、與四郎と思ひの外ヤ……」　上『あまりの事に呆れ果被も抜けたる計りなり妻と　千「コレ旦那殿與四郎を殺しさへすりゃ此娘が得心すると思ふあるにもあらねぬ思ひ』　ての過ちか知らねども八人持つた子の内にたつた一人生殘りし娘サア生かし戻して下さんせ」　上『盤叩いて女房が恨みかこてバ娘の露葉苦しき息の下よりも』　露「モシかゝさん私しゃ覺悟の深手故必らず泣て下さんな」　上『言へバ女房不審顔』　千「ナニ覺悟の上の深手とは」　露「サア聞て下さんせ殿前料らず樣子を聞けバテモ恐ろしい工みの談合此身さへ死なら夫で操を破りもせず又外に子もなければ與四郎さんに家田地を戻してわ

げて下さんせうと義理を情けに身一ッを捨たのでムんすわいなア」　上『言ふも苦しき手負の樣子立聞く奥と爽表鎌六はつッと入り』　鎌六「樣子は門トで聞ましたテモお優しいわなたの心コレ與四郎殿こなた故に旦那の手にかゝつて切られさッしやつた」　上『田夫野人の心にも感り上げたる涙の誠與四郎も猛堪り兼』　與「コレ露葉殿今宵の詞の訝かしさに取て返して樣子は聞た此與四郎を殺してくれたら伯父様の心も休まり今の苦思も助かるうに何で明して呉なんだこなたが却つて浦山敷い」　上『身の憂きことに死を恨む怨みに千種も察し遣り』　千「コレ旦那殿伯父の邪見を恨みもせぬ與四郎が今の詞といひ八人の子が斯ういふ仕宜になつたのも強慾悲道の皆んな罰物にと報ひのあるものじやわいなア」

鎌「此鎌六も今迄は主見習ふて我を張り升たが今日といふ今日バかりは驚き入つた此鉄鉢「ド鉄鉢の碎片を出し」最前畑へ出た序で取て來たコレ此鉄鉢かけも失ずに此國迄飛で來た不思議といひ數も同じくお子の死やう是でも報ひでムり升せぬか」　上『我から浮む善心も御法の德の導さし下男の詞に三郎も見覺えのある鉄鉢にホッと一ト息突くばかり應えもなければ娘は這ひ寄り』　露「モシとゝさん今から心を改めて與四郎さんを子と思ひ太事にかけて下さんせ」　與「モシ伯父樣子が可愛ひと思召さば」　千「慈悲も情けも知るやうな心になつて下さんせ」　鎌「お子を八人地獄へ落すも極樂往生させ升もあなたの

心たつた一ッ」　四人「モシ手を合せて拜み升わいなア」　上「七人の位牌を差つけ手を合せ頼む勸めに三郎が胸は燒きがね熱湯を注ぐばかりの苦しさに五臟六腑に込み上げし涙は兩の眼に溢れカッパと伏て詞なし良々わつて聲を揚げ」　三「ハア、今といふ今我あがら過まつた事してのけた兄が病死の其際に旅と甥を娶合す迄後見せんとは僞りにて慾に眼が暮れ娘をば」　上「心よからぬ雲速が慰み物に與えんと約せし其日に出逢し○空海といふ坊主をば打つたる杖は親が子の躰を打たる報ひとは心もつかず與四郎迄」　上「殺さんとせし慾心に眼くらみし暗紛れ○娘と知らず討づたる三郎免して與れよコレ子供等」　上「娘を初め七人の位牌に詫る三郎が涙はわけの玉霰血汐を注ぐばかりなり聞くに手負は目を見開き」　露「嬉しや爺さん心が直つて下さんしたかいなア」　千「其心がモウちつと早うついて下さんしたら八人迄か此樣な非業な最期はせまいもの」　鐘「皆罰の報ひと思へば實に尊ひ彼の日の御出家」　三「聞は西國へ渡るとある其日の言葉を便りとなし我は今より行衛を尋ね此方の詫や且は我子の二世安樂現世の罪を亡ぼすには家の財寶皆貧民に施行なし兄より讓り受たる物は與四郎今はそちに渡せば我の出た日を命日と跡懇ごろに吊らひくりやれ」　上「性と善なる三郎が惡念悔悟に打悅び」　露「そんなら爺さんお前と今かち」　三「佛の力ならずして浮む瀬もなき極重惡人」　與「今善心に歸られしも全く空海和尚とやらの」　千「目前因果を示されし功德に依て恐ろしい」　鐘「鬼見るやうな日那樣が殊勝な心にならしやつたも」　露「元はといへば鉄鉢の報ひに身をば果したる」　三「八ッの割れは我子八人親が邪見に失ひし世の戒めに元の所へ埋め置き」　與「末世末代」　皆々「跡を止めん」　上「言ひし所は鉄窪と古迹ぞ今に遺りける三郎猶も妻子に向ひ」　三「今旅立の時に臨み責めて娘が望みをば未來でありと遂げさすやう」　千「二世を固めの盃は未來へ趣く水杯」　上「慈と無常を二道に分けて悲しき死出の旅白き脚袢に手覆さへ今を限りの憂き別れ佛間に供へし手向けの水三々九度や二世三世現世後生を身に負ひし葛籠も重き其身の罪科懺悔慙愧の旅支度與四郎涙のひまよりゃ」　與「最前迄も言ふ通り未來は必らず女夫じや程に待て居て下されや」　上「といふ手負は嬉し氣に」　露「其一言が私しには千部万部の御經より嬉しう思ふて成佛仕升わいなア」　三「生死の道はかわれども」　露「けふを出た日の命日とは」　三人「思へば果敢ない」　鐘「モシお嬢樣」　與「チ、最早近づく」　三「血死期の旅立」　千「そんなら是が」　三「女房與四郎隨分達者で」　千「お前も無事で」　露「とゝさんれ去らば」　三「ア、有爲轉變の」　四人「世の中じやなア」　上「手負は今が斷末魔紫雲の旅立目前茲に鉢窪や右衛門三郎八ッ塚と其名は朽ず遺りける（「卜露葉は落入る三郎旅形に成り門ト口へ出る

三人と愁いのこなし此摸樣宜しく床の段切に　幕

六　幕目　賀川照主館の場　同愛妾小櫻殺しの場

同奥庭綾子物狂の場

役人	替名		
一空海阿闍梨	一賀川照主	一愛妾小櫻	一賀川太夫雲速
一乳人虎枝	一下部宅郎	一深塚國見	一侍女菊の戸
一丸川藤内	一腰元夏菊	一同藤浪	一同糸瀧
一同駒鳥	一徒弟眞如	一同眞紹	一同圓澄
一奥方綾子の前	一侍大勢		

竹本連中

○本舞臺常足の二重本樣附見附花鳥の書割手塗骨障子家体此内佛壇下手通りの廊下平舞臺上の方泉水一面に杜若の植込み下の方卯の花の盛り楓の釣枝都て賀川家奥殿の摸樣夏に腰元四人住居此見得琴唄にて幕明く　夏菊「何と皆さん今を盛りの杜若が何うい〻ものでせう」　藤浪「此お泉水は空海阿闍梨といふ御出家が高野の奥の玉川よりお引きあされしお庭の水」　白糸「其水が清らか故奥樣のお飲み料に迄遊ばすもの」　駒鳥「何ぞ凶事ある知らせでないかと御家中の御評諚」〔ト廊下より深塚國見出て來り〕國見「女中方綾子樣には何れにお渡りあさるゝぞ」　夏菊「先程より御佛間に」　國「ナニ御讀經とな事雲速參つて申聞けん〔ト下手廊下より雲速出て來り〕」　雲「イヤナニ綾子チト密々に申入たき一義あり」　國「腰元衆には暫時此座を」　四人「畏まりました〔ト下手へ這入る〕」　綾「シテ御用とは」　雲「綾子是へ〔ト綾子下手へ來る〕此程より照主には小櫻が許へのみ通ひ妻たるそちと無きが如し唯今より照主を離縁致さにや相成らぬ」　綾「是は赤いつに變らぬ伯父君のお詞人並ならぬ妾わゆへ責て夫トの慰みにと自らが目鏡に小櫻といひ何うしてまア其樣な」　國見「夫があなたの最負目と申すもの」　雲「照主此程小櫻が腹に舍りし餓鬼めが平座加持の爲め七日の間高野に籠り祈禱なすとは眞赤な僞り彼の琴の音は耳に入らぬか兎角照主そちを嫌ひ小櫻が部家に入りひたり」　國「

まだ其上にあなた樣を害せんとする工み事」　綾「なんと言やる」　虎「水上より毒藥流しあなたを殺す手段の毒水さなくば何として此花の萎む謂れはムらうや」　綾「控へよ國見人にこそよれ妾わが夫何しに左樣な事をなさるべき」　國「ムリヤ目前証據がありても」　綾「千歳を齡ひし住吉の松さへ枯れし例しもあり大かた旱の故ならん」　宅「イヤモウ國見何事も申すに及バぬ我爲には一人の姪なりと思ふ故斯迄申聞すなり必らず後悔する時あらん國見來やれ」〔ト兩人奥へ這入る〕　綾「いつに替ぬ伯父君の邪しまを夫の身の上小櫻が含せしお胤に凶事の無いやう日毎に讀經の經陀羅尼ドレ今一巻ゝげませう」〔ト口を嗽がうと泉水の水を柄杓にて汲み上げる此向差し金の鴛鴦一番ひ出て來り水を潜りバッタリ倒れるハテ心得ぬ鴛鴦の水を潜ると其儘に死せしはハテナア〔ト杓の水を下手の卵の花に注ぎかける仕掛けにて一時に萎れるヤ、卵の花の萎みしは扨は高野の玉川に毒を流して妾を殺す工みでわつたるか〔ト柴垣の蔭より宅郎頬冠り抜刀を提げ出て來り切て懸る綾子襠を脱ぎ向刃を押へ〕　綾「狼藉者〳〵〔ト奥より虎枝走り出て來り宅郎を捕て押へ〕　虎「サア奥樣へ刃物を向けた一体おのれは何國の何者ヤアそもじはお暇の出た宅郎ではないかいのウモウシ御覽じませ宅郎でムり升る〔ト頬冠りを取る〕　綾「其宅郎が何の意恨で妾わをは」　虎「サアちやつと夫を言やいのウ」　宅「實は奥方に恨みといふは此虎枝と乳衆合ふたを科として宅郎獨り暇を出すとは片手打の捌き故殺して意恨を晴さう爲め」　虎「コレ〳〵宅郎夫は皆雲速樣の計らひにて私もお暇の出る所をお宥しわりしも奥樣のお情け夫にお恨み申て濟むかいなア」　宅「そんなら伯父御雲速のお差圖か」　綾「嘸や舘を出し後と難義もしつらんコレ虎枝手函をもちや」　虎「畏りました」〔ト手函を出す綾子は金の包みを取り出し〕　綾「些少なれども是にて其身の營みしや」　宅「ハア、奥樣御免なされて下さり升せ殺しに參つた宅郎に却つて金までお惠み下さるお慈悲に引替惜いは殿樣と彼の小櫻能くも此宅郎を喰はせたなア」　虎「ナニそなたを喰せたとは」　宅「モウシ奥樣御油斷はなりませぬぜ」　綾「何といやる」　宅「お暇の出た翌日殿樣が下郎をば小櫻殿のお部家へ召れそち一人暇を出せしは奥が計らひ我寵愛の小櫻とておのれが勸めて置きながら今となつて憎み嫉み調伏の法を行ひ腹の子迄失わんと爲す奥が悪計其方我に代つて綾子を失ひくれよ禮と望みに任せんと下にも置ぬ取扱ひ聞けば聞く程奥樣憎しと念ひ込し一心から斯ういふ仕宜に及び升たも眞平御免なされて下さりませ」　虎「ヤ、そんなら殿樣とわの小櫻が」　宅「まだ夫ばかりじやムりませぬ男と生れて化者を奥と言るゝ迷惑も賀川の家身代が欲しさ計りで連添へども胸が悪い唾を吐き今頃こ此宅郎が奥樣を殺したものと安心さらして晝から寐て居ること、思へば腹が立やら悔しい

やら」　虎「コレ〳〵宅郎殿様には七日以前高野へお登りあそばされたに」　綾「コレ虎枝殿様と小櫻の部家にお出なさる事わしや知つて居るわいなア」　虎「そんなら高野へお登りなされずシテ毒を仕込みしとは」　綾「外ではない此泉水」　虎「夫をあなた御承知なら何んで早う仰ッしやりませぬ」　綾「言わいで置ふかサア宅郎案内しや〔ト懷釼を持ち屹度成る〕」　宅「其お腹立は御尤で厶り升れど殿様より下郎へは堅い口止め是斗は御内分に」　綾「エ、何にも言やんな妾わが胸にあるわいのウ」　宅「そんなら何うでも」　綾「詞を背くか〔ト懷釼抜きける〕」　宅「モウシ〳〵ぞうおされ升る」　綾「虎枝水を」　虎「畏りました」〔水をかけやうとするを〕　綾「ア、コレ待ちや其水は妾を殺さうと工みに工みし玉川の」　虎「アノ毒水で厶り升るか」　綾「見るさへ腹が〔ト白刃にて柄杓を叩き落すが道具替りの知らせ〕立わいのウト屹度見得此仕組く此道具ぶん廻す、

○本舞臺高二重見附床の間違ひ棚御簾襖上下後へ下げて網代塀櫻の立樹卯の花の柴垣いつもの折廻戸都前小櫻部家の体塗骨障子を締めあり時の鐘合方にて道具納まると床の上るりに成り　上『咲にけり我山里の卯の花は垣根の露とつらねたる夫にはあらで物數奇は賀州中將照王が時めく庭の風流に四季を絶さぬ花よりも増る眺めの小櫻が居間は主じの留主事に慰さむ琴の調べさへ奥を懼かる忍び音は遠慮勝にぞ見えにける〔ト障子を引捨くと内に小櫻琴を彈き仕舞し体下手に菊の戸腰元の拵らへにて控へ居る〕　小櫻「夫につけても奥様には我君様のお留守にて嘸お淋しうお渡りなされうそなた太義ながら夫へお側に參つて苦しうゞムり升せぬかと伺ふて來てたもいのウ」　菊「畏りまして厶り升る〔ト雪洞を燈し庭へ下り〕」　菊「ほんにまアお部家と奥様のお睦まじいといふものゝ好いものでムり升るなア」　小「夫といふも奥様のお心立が好い故に何彼に就けても妾しが仕合せ」　菊「左様なれば旦那様」　小「暇取ぬやうに往てれとや」　菊「ハイ」　上『心も軽き庭下駄の音かるゝと出て行く小櫻跡を打視遣り』　小「菊の戸の戻る迄責てゝ琴なりと慰みに然うじや〳〵〔ト琴を彈く向ふより虎枝雪洞を持ち綾子被布形りにて宅郎附添ひ出て來り舞臺へ來る虎枝態と雪洞を消す綾子驚き〕」　綾「飛粗者め」　虎「どんな事を致しました」　不審の思入にて　小「ヤア誰やら聲のまだ菊の戸の戻る筈では」　上『と言ふは確かに小櫻が聲と知るより堪り兼ね』　綾「爰へ來たのが邪魔になるかや」　小「譯もない事おつしやり升な今宵は殿様御歸館と存じ升れど嘸かし御退屈と存ぜ升て實は唯今菊の戸を」　綾「ハイ琴の調べの戯れに賑わふそなたの部家とゝ違ひ秋風立し巣守りの妾わ淋しうて何をせうサア隠さずゝ是へ出しやいのウ」　小「出せとゝ何を」　虎「殿様を是へ出して

貰ふの玄や」　小「足はしたり殿様にくきのふの朝高野へれ登りあそばしましたは奥様にも能う御存玄でありながら」　綾「ィヤ高野へ登山と偽わつて隠してある事を知つて居るわいのウ」　小「滅相な事おッしやりませ誰が亦左様な事を」　綾「ソレ早う呼びや」

虎「ハイ宅郎どの早う〳〵」　上「言ふに宅郎ズッと入り」　宅「ヂイ小櫻さん此宅郎にも隠されまい殿様を人知れず茲の部家にけふまで置て能くもれれを一杯喰せたな！」

小「エ、いつ又そんな」　宅「さつきも殿様と二人りで頼むで置ながらコリヤうぬは隠すのだおいつ迄も隠して見ろ殿様さへ爰へ出しやア分る事だ」　小「夫でもれ越のおいものを」　宅「モウ奥様是は荒療治をせねば白狀致し升せぬわい」　上「言ふより早く會釋もなく緑の黒髪を引掴み庭へ曳と引据ゆれば小櫻愕き聲を揚げ」　小「何科わつて此身をは」　宅「何科もねへものだ能くもかれに智恵をかひ奥様を殺さうと仕やアがつた今日といふ今日奥様のお慈悲深い事を初めて知つて其申譯に日の前でうぬ等の悪事を白狀さすのだ」　上「立蹴にハッと蹴返せば小櫻恟くり取り縋り」　小「コレ宅郎奥様を殺さうとはマァ誰が頼みで恐ろしい」　虎「殿様と心を合せしそなたの頼みでわろうがな」　小「滅相な今殿様の御寵愛を蒙むるも皆奥様のお情け故何お恨わつて勿体ない」　綾「默りや〳〵〳〵いのウ能うもそなた衆言ひ合せ毒を流してまだ其上宅郎に言ひつけて妾わを殺さうとは爲したるど情けも今は仇と成り妾しやは口惜いわいのウ」　上「常に變りし婦氣の炎燃立ばかりの一言に小櫻迚はと推はかり」　小「此身にと夢更覺えぬ其お詞跡方もない事をお取上げ遊すとと」お怨めしう存じ升る」　虎「サア殿様を疾々早う出し居らぬか」　宅「隠してもモウ駄目だ昨日迄召て厶つたわのお衣服」　小「夫はお立ちの節お召替」　綾「ィヤ〳〵此衣服の脱ぎ捨て様では今迄そなたと寐て居やつたでわろうがな」　小「何でマア左様な事が」　宅「是へ出したら工みの底が拔ける故夫で爰へ出さぬのだな」　虎「元の身分を忘れくさつて恩さへ知らぬ犬畜足」　上「と足蹴にハタと蹴倒せば小櫻今は耐え兼ぬ」

小「コレ虎枝腹土足にかけし小櫻は素性卑しきものなれど舍りしれ嵐は御世嗣ぎ」

虎「ヤ」　小「左り孕みは男子の徴し胎子はお主厶んすぞへ」　綾「默りや賀川の家は妾わが家左程大事のお子なれば男子か女子か此綾子が改めてやらうわいのウ」　上「詞鋭と く拔き放す白刃の光りに身を震わし」

ハテ嵐は妾が夫の子か腹裂て吟味するのじや」　小「コリヤ奥様何んと遊ばし升ぞいなア」　綾「

宅「エ、動きやアがるな」　虎「どんな餓鬼めか御覽遊ばし升せ」　上「側から攝ぐ

胸の火の炎の如き嫉妬の綾子靜々庭に下り立ば小櫻魂消え入る計り」　小「マア〳〵待て・

下さりませ此身に覺えはあけどもお疑ひの晴ずして」　上「御恩にかへる我身一ッは更々

惜みは致し升せぬ』　小「科も報ひもない腹の子はお助けなれて下さり升せ夫もかなわぬ事あれば」　上『せめて現世の明りを見せて妾しや死なしたら厶り升る」　小「そうぞお慈悲に身二ッになる迄待て下さりませモシ奥様お慈悲で厶り升るわいなア」　上『お慈悲情けと手を合せ怨みつ詫つ様々に身を悶たえるいぢらしさは他所の見る眼も哀れなり綾子乙更に目をかけず』　綾「恨まば恨みや泣かば泣きや」　虎「コレ此美しい顔で殿様を盗みやつたか〳〵ト懐劍にて顔を突く此手で我君と抱寢を仕やつたか」　小「アイタ――――」　虎「チ、痛かろう」　綾「ソレ二人の若身動きせぬ様」　両人「心得升た」　上『情けを知らぬ現世の牛頭馬頭小腕把て引倒せば尚逃れんと身をあせる襟元しつかと押へつけ胸先寛ろげ乳の下へグッと計りに突立れはハッと魂切る七轉八倒』　小「いかに此身が憎しとて余りといへば邪見な奥様菊の戸は戻つて來やらぬか苦しいわいなア」　上『苦しいわいのと身を藻掻けば』　綾「チ、苦しかろう〳〵さだ是でもか〳〵」　上『嬲り殺しに研り下げる腹は涙打苦しみに雪の膚へも曙の朝たを待たで小櫻の散て果敢なく成りにけり』　宅「奥様息乙」　虎「堪ね升た」　綾「是にて妾わの恨みも少しは」　宅「シテ此裂し腹お餓鬼めと」　綾「夫にも妾が所存もあれば照主殿を逃ておじや」　宅「サア其敵様は」　綾「エ、疾々連れておじやと言ふに」　宅「ヤア向ふに見もる燈火は」　虎「菊の戸が戻つて來たに違ひはない」　宅「奥様には一ト先愛を」　綾「チ、腹の餓鬼めを早う出しや」　虎「心得升た」　上『口にけ言へぬ氣味惡く切口より手を差入て引出したるみどりの孩子』　虎「モウシ奥様此マア氣味の惡いと言ふたら」　綾「思へば憎い其嬰子」　虎「死出の田長の一ト聲の」　宅「産聲さえも上げずして」　綾「暗きに迷ふ親と子が」　虎「此死ざまで」　両人「ちつとは胸も」　綾「テモ心地好いホ、、、、」　上『につたり笑ひし凄艶黑の口は耳迄裂たる計り女の念と』ト此摸様宣敷三重にて此道具ぶん廻す

○本舞臺平舞臺見附金襖橋懸り杉戸の見切大欄間を下し中央に大對立都て賀川舘廣間の体愛に以前の雲速立懸り國見拵へ居る此見得早舞にて道具納まる　國見「お喜こび下さり升せう、豫て喋し合せし通り宅郎虎枝首尾好く仕課せ升たれば照主今にも立歸らばヨモ其儘には致し升まい」　雲「チ、一ト筋でゆかぬ綾子も雲速が罠に懸り最早是迄仕課せたれば大願成就近きにあり」　國「其歡こびに引替て右衞門三郎が娘露葉の最期に依て三郎迄も廻國修行に出しとて計りし事も水の泡」　雲「其義は言ふても返らねど乗措れぬは彼三郎我大望を口走らんも料られず其方今より四國へ渡り討て捨るが後の用心」　國「然らば拙者は今宵の間に」　雲「路用の手當○ト金を遣り急げ國見」　國「心得升た「ト向ふへ這入る」

雪「ム、是で宜し〳〵〔ト向ふにて〕　○「殿様の御歸館」　雪「照主が歸りしとか
上「何か心に打點頭き待間程なく立歸る當家の主じ賀川照主せきにせいたる急き足〔ト
照主近習四人雪洞を持ッカ〳〵と出て來り〕　照主「夫にお渡りあるは伯父君に候はずや」
雪「おことゝ照主是へ〳〵」　照「御免〔ト居直り〕其方等は下れ〳〵〔ト近習は下
手へ這入る〕　雪「見れば心急きの樣子何ぞ氣遣ひな義でもなきか」照「何が昨日高野に登り
空海和尚に見えし所汝が家に死性の者あり我直ちに立越えん早歸れとのお詞に心許なく歸
館致せしが何ぞ館に變りし事でも」　雪「イヤ決して變りし事は」　照「夫は何より重疊
コリヤ誰かある奥を呼べ」　雪「イヤ手前是より奥へ參れば呼んで遣わそう」　照「夫は
近頃恐入升」　雪「隨分勞れを休めたが好いわい」　上「甘き詞の腹中に針を隠して入り
にけり照主後を見送りて」　照「合点のゆかぬ空海殿の御仰せ何にもせよ事なうて一ッの
安堵」　上「胸落着し折柄に妻の綾子が聲として」　綾「ナニ我つまの御歸館となお目通
り致し升せう〔ト綾子腰元附添ひ出て來り〕　綾「我夫には唯今御歸館遊ばし升て」
皆々「ムり升るか」　照「ヲ、綾子か先づ何より話しを致そうか空海樣に御意得し所」
綾「ア、イヤ我夫其お談しゝ後に緩々マヅ何よりはお勞れ休めに御酒一ッコレ腰元衆虎枝
に御酒肴茲へと言や」　腰元「畏り升た」　虎「アイヤ其御酒肴唯今夫へ」　上「言ひつ

〻持出る烏臺に腰元共も立代り銚子抔頭肴數も歸館の悦びと所せくまで並ぶれば照主殊に
機嫌好く」　照「ヲ、安産祈りの辰りを祝して目出度く一献過すでわろう」　虎「ドレ其
お酌は妾しが」　綾「イヤ酌ゝ妾がする程にそなた樣は奥へ行きや」　四人「左樣ならば
虎枝樣」　虎「サア參り升せう〔ト奥へ這入る〕」　綾「ドレお酌を致し升せう」　上「日
には言へど心には銚子の酒も沸え立ばかり妻が怒りに恐めつかず」　照「奥の酌と思へば
どうやら格別」　綾「お胸が惡う ムり升せうなア」　照「何ゝ言やる」　綾「小櫻ならば
御意にも入らうが片輪者の自らではお胸の惡いも御尤も其お日直しのお肴には是を御賞味
なされませ」　上「隠し持たる懐劍を拔より早く貫ぬきし嬰子をグッと差附れば照主悔く
り打慄き」　照「ヤア是は」　綾「こなさんの愛しがる女の腹に孕みし嬰り兒」　照「そ
んなら留主中小櫻をば」　綾「言ふな言やんな最前小櫻の腹を計きし時こなた隠れて居た
でわろうがな夫程大事の愛しい子おら啖ゐ〳〵喰やいのウ」　上「行儀作法も何所へやら
言葉の角も荒々敷く突附けられて賀川照主其手をば捕て押へ」　照「どういゝ仔細か知ら
ねども目も當られぬ無慚の仕業察する所嫉妬じやな」　綾「ヲ、嫉妬じや〳〵〳〵わいな
アエ、口惜しいわいなア」　上「無念〳〵と見る内に赤子の宍むら啖ひ裂き〳〵物狂わし
き有樣ゝ恐ろしなんど愚かなり斯と容子を菊の戸が一ト間の裡より走り出」　菊の戸「ヤ

、奥様にも嫉妬の念よな」　綾「チ、おのれも恨みの女の片割れ見よ〳〵家は絶ゆるとも館の男女喰ひ殺しれのれ照主命を取いで置べきか」　照「執念深き女の一念者共綾子を捕押へよ」　大勢「心得升た」　ト上下もより袴股立の侍大勢出て來り立廻りあつてト〻一人の侍の咽へ喰ひつき死骸をもつて皆々を追ひ廻し奥へ這入る」　照「何共以て不思議の事ども菊の戸來れ」ト奥へ這入る跡知らせにつき網代幕を冠せる是より家鳴震動の鳴物に成り上下より雜掌四人出て來り」　○「ヤレ〳〵恐ろしやコリヤどういふ譯であろう」　△「黒髪乱し口の廻り」は血汐の紅」　照「口と耳迄裂けた樣子思ひ出しても慄ッとするわい」ト鳴物烈しく成る」　○「そりやこそ又鳴り出した」　四人「桑原〳〵」上下へも別れて這入る鳴物を打上げ」　上「凄まじき賀川の館の奥殿庭先恰かも百雷一ッ時に落るが如き震動雷電物凄まじくも亦怪しけれ」ト鳴物を冠むせ知らせにつき網代幕を切て落す

○本舞臺上手寄りに二間の家体黒塗の匂欄附き前側塗骨障子後に引抜くと向ふ千畳敷の遠見に成る誂らえ平舞臺座敷を見たる庭先の遠見此前一面の柴垣卯の花の盛り下手網代塀の出しかけ楓の立樹都而賀川館奥庭の体荒れの鳴物にて道具納まる　上るり「結構霊せし奥庭の樹木下た草引裂踏立多くの力者を事ともせず繊弱き女も嫉妬の一念荒に荒てぞ」ト家体の後より綾子侍大勢を追廻し出て來り蛇形の立廻りあつて　上「蛇身と變せし悪霊の因果は廻る小車のクルり〳〵ぞ蔵空に昇り飛行のさまぞ」　綾「今にぞ思ひ知らしてくれん」ト宙乘りに成り」　上「館の主じ賀川照主菊の戸諸共立出て」　照「テモ恐ろしき綾子が悪念」　薬「蛇体と變ずてアレ〳〵〳〵」ト綾子宙乘のまゝ向ふへ這入る」　照「ソレ菊の戸綾子の跡を」　薬「心得升た皆さんムんせ」　上「跡を慕ふて欠り行く引違へて表の方」　藤内「御注進〳〵」雜掌出て來る」　照「チ、そちと雜掌丸川藤内何事なるぞ」　藤「さん候僕がれ御門の築地の外に屹度張番致せし處」　上「俄に吹き來るはやて風青空變じて真黒々雲ソリヤこそ光つて雷りゴロ〳〵ぴッしやり眼の先へ」　藤「落たは雷」　上「イヤ〳〵〳〵コワ〳〵見たればコリヤどうじや御臺所が蛇身の姿でてこねあされて茶々無茶苦茶」　藤「誠に申すもお氣の毒」　上「れ氣の毒やと汗たら〳〵口重にこそ喃べりける」　照「スリヤ門前へ落たるとか」　藤「仰せの通りにムり升る」　照「ムゝ此儘にも捨置れず汝は疾より我主家へ此場の始末お耳に容れよ」　藤「心得升た」　上「顔も心も丸川と門前さして引返す」　照「ア、不愍な奥が最期じやなア」　上「悲歎の涙にくれ居たる時しもこなたに空海阿闍梨數多の御弟子附添ひて一ト間の障子開かせ給ひ」　空海「いかに照主今ぞ思ひ當りしか」　照「ヤ、そういふ貴僧は空海阿闍梨ハゝハア、

空「前生の悪業現世の罪を亡ぼす爲め汝が困究救ふの道なく唯涙に袖を濡せしぞや」
照「過去いかなる悪業にや我妻といひ妾といひ舍りし子さへ非業の最期を遂げしを思へば未來の苦患も嘸かしと思ひやられ候なり願わくば御教諭に預かりたし」　空「おことが起せし前生の罪も滅ぼす事ありとも現世の罪は免がれ難し悠僧と同道爲して四國に開きし靈地を踏まば死せし妻子も佛果を得前世の業因又かへすべし」　照「ハア有難き貴僧のお示し」〔ト此時橋懸りより侍二人綾子が死骸を手擔ぎしにして出て來る〕　照「生きながらにして蛇身となりし一念去つて最期を遂げしか」　空「イヽヤ五倫の形ちは死すとも惡念は五躰を去らず今より我高野に葬り成佛得脱致さすべし」　○「アヽイヤ師の坊」　□「高野は無双の佛地にして」　△「女を禁じて母君の登山すら」　○「許し給わぬ清淨無垢の靈地なるを」　×「女人をば」　四人「理めんことは」　空「イヤ汚れ不淨は心にあつて死体は言ゝ枯木も同然忌べきの謂れなし墓の誌しに一ト樹の柳岸の蛇柳と名附くべし」　照「夫に就けても綾子が嫉妬何共以て心得ず〔ト此時雲速虎枝宅郎奥より出て來る〕」　雲速「汝小櫻と玉川に毒を流し綾子を害せし工みより」　虎枝「斯ういふ事にあつたのも」　宅照「衆ゝと言へば殿様ゆえ」　雲「疾々茲を出てうせう」　照「此身に覺えはなけれども今より空海師に帰ひ五悪の塵を免がるべし左は去りながら今日迄隠ら得ずして酒色に耽りたる歟み盡て悲みの」　空「世の轉變は斯くの如し柳は綠花は紅」　照「妻と柳と遺れども散て果敢なき小櫻の」　空「色は匂へど散りぬるを」　照「吾世誰ぞ常ならんヤア」　空「有爲の奥山今日越えて」　照「淺き夢見し」　空「醉もせず」　照「實に人界の苦しみを」　空「悟れば八苦」　六人「四句の文」　雲「夫も高野の玉川へ」　宅「毒を流せし」　虎「悪事の報ひを」　献役三人「思ひ知つたか」　空「イヤ忘れても汝みやしつちん旅人の高野の奥の玉川の水流水元の水にあらず忘れても汲め玉川の毒は心にあるものを」　雲「ヤア」　空「澄ぬは人の珠數にて拂ふのが木の頭心じやなア〔ト是にて敵役三人は息込む照主扨はと曉る思入此摸様宜敷く合方にて柏子幕

七幕目　阿波國立江寺の場　同燒山絶頂の場

役人替名	文六	一右衛門三郎
一空海阿闍梨	一百姓	一仕出し四人
一深塚國見	一賀川中將照主	一弟子坊主四人
	竹本連中	

○本舞臺後淺黄幕此前土手の張物松の立樹上手石橋の出し掛け立江寺と記せし建石松の

釣枝都で阿波國立江寺の摸樣下手に土龕を置き文六親仁の拵へにて火を吹て居る中央に廻を鋪き廻國遍路の仕出し四人休み居る此見得双盤にて幕明く　○「モシ親仁さん空海樣がお弘めなさる御宗旨なんと有難い事ではないかいの」　文六「マッ現在の御利益といふは此盤場を遍路した者どんな病でも治らぬといふものは無いわいの」　△「ソリヤモウ人の事より吾が證據三年以來のヒエ病此四國を廻る内いつともなしに瘧氣の拔け」　□「わしも永らく眼を病むだが内障の病ひの治つたも空海樣の皆お蔭げ」　×「其代り又罰も覿面ぢやそうな」　文「其罰の證據といふたら此立江寺へ罰障の深い者が參詣をすればソレ其石橋に白鷺が下りるじや夫にも搏わず渡ろうとすれば五体のすくむ者もあるわいの」　○「然ういふ事なら白鷺の下りぬ間に參らうではあるまいか」　文「何の心に蟠まりさへ無い人なら綴ッくり休んで往つしやれ」　□「イヤ〳〵足しない路用の遍路故」　文「イヤ錢貰わふとて言ぬのじや」　△「そんなら攝待に振舞ふて」　四人「下さるのか」　文「是も吾等の奉公じやわいの」　×「夫は奇特な事じやが又戻りによれば升せう」　文「參詣なら一緒に參り升せう」　四人「そんなら爺さん」　皆々「ナンアベキヤベロシヤノ」

「ト皆々上手へ這入る向ふより右衛門三郎そぼろなる拵へ破れたる葛籠を負ひ出て來り」

三郎「我故郷を出しより凡三年空海和尚に巡り逢んと此四國遍路おすこと既に二十一度に及べども未だ廻り遇ざるは罪障のなすところか何にもせよ最早向ふと立江寺暫し彼れにて休らわん然うじや〳〵」「ト舞臺に來り此立江寺に詣するに何日迚も此石橋に白鷺下りて我を支え進まんとすれば五躰すくみ動かれず幸ひ橋上に白鷺の居らざると我願望空しからぬ知らせと見えたり チエ、忝けない」　上るり「歩み寄んと爲す折しも一陣の風に伴れ石橋に下り立一羽の白鷺右衛門三郎打視やりア、最早白鷺の來りしか當寺に安置なす地藏尊冥助を垂れ給へ歸命頂禮〳〵」　上「一心定め石橋を越んとわせる三郎が行ては戻る後ろ髪引るゝ心地タヂ〳〵〳〵發方嵐に漂えゝ間忽ち吹き來る一ッてきの風諸共に三郎は虚空遥かに飛び失せたり」「ト宙に釣上げる」　上「行空のまた〳〵く間に十餘里を投げつけられし右衛門三郎我にもわらで大杉の梢に懸り死したるは作りし罪の報ひとて鉞の山にわらねども身を逆さまの現罰は身の毛もよだつ計りなり」「ト知らせにつき道具上下へ引て取り淺黄幕を切て落す

○本舞臺向ふ一面山亦山の遠見中央に莫大なる杉の大樹此枝左右に茂り是に右衛門三郎杉の枝に懸り居る都而阿波國燒山絶頂の摸樣上るりにて道具納まる　上るり「斯くと見しかば白羽の鏑矢々聲と共に杉の枝ハッシと射切りし弓勢にがバと落たる右衛門三郎」「ト向ふより照主出て來り」　照主「今草の家に休らふ内何處ともなく杉の梢に懸りし旅人を助け

んと獵矢に弓を借受て覘ひ遣わす杉の梢を射切て落せしが生死の程と覺束なしゃ、然うぞや〳〵」　上『點頭き登る嶮岨の山路夫と見るより引起したる情けの介抱惣身聊か疵も無く五躰の呼吸に障りなし幸ひの奇藥を與えん」　上『聲を限りに呼び生れば未だ命數盡きざるや三郎ウンと息吹き返しヲ、心がついたか何處にも怪我は無りしや」　上『云ふに三郎遯りを見廻し』　三郎「是は〳〵見れば出ある貴人のお姿あなた樣が御介抱をば」　照「茲と則阿波國にて何と申處でムり升る」　照「いかにも」　三「シテ此處は何國にて何と申處でムり升る」　照「茲と則阿波國にて燒山と申す山中どや」　三「エ、すりや立江寺より凡そ拾余里瞬く間に投られしかム、」　上『何思ひけん両肌押脱き刀拔くより我肚へグッと計りに突立れば是はと愕く賀川照主手負を其儘引起し』　照「コリヤ旅人に乙何故の此切腹」　上『尋ねに手負は目を見開き』

三「惡の報ひの身の懺悔お聞下さり升せ吾事は伊豫國衞原の里の鄕士にて右衞門三郎と申者生れついての慾心が增長なしての非義非道吾子八人三日三夜に殺しましたも空海樣を手込にせし不善の祟りと始めつて悟つた此身の罪業我身のお詫び且は又子供の苦患を助かるやう空海樣の御敎化に預りたい計ッかりにお跡を慕ふて二年越お逢ひ申さぬ惡逆の罪は目前今日の仕宜死でお詫びをする覺悟因果な者でムり升」　上『一伍一什を物語る手負の詞に涙を催ほし』　照「吾も惡業の障りを拂わん其爲に空海阿闍梨の敎化に隨ひ四國に渡りて引別れしが何卒して今一度巡ぐり逢ひ度く遍歷なせども出會ざる本意なさと御身も吾も異らず」　三「因果同士が寄合ふて」　照「介抱致すも」　三「受けるのも」　照「思へば不思議の」　両人「奇緣じやよなア」　上『あじきなき身と諸共に悔み涙に暮れ居たる何時の程にや空海阿闍梨後ろの方に立給ひ』　空「前生の業因茲に歸し現在の罪を果せしよな」　照「ヤ然ういふ貴僧と空海阿闍梨」　三「ヲヽお懷かしうムり升る」　上『おなつかしやと苦痛を忘れ夫を拜せし悅びは理りとこそ見えにけり照主と礼儀を繕ひ」　照「前生の業因茲に歸すとは如何なる譯にて候ぞ」　空「ホヽ其不審尤も至極今おことが前生の因果を示し申べし」　上『木の根に御膝を懸け給ひおこと等が前生と當國に產れたる義利ある中の兄弟にて繼母は實子の弟に家を讓らんとの邪念より其兄弟の刃にかゝりて兄弟又出家を遂げ母が菩提を吊ひし功德に依て賀川の家の養子となりしは照主にて其繼母は綾子と產れ現世に於て妻を失ひ妾を殺ろされしも皆前生の惡業ぞや又實子の弟は右衞門三郎と產れたり汝前生にて出家なせども戶隱山にて賊八人を殺害せり其賊八人の子と生れしが終に我子の其爲に實を擲ち死に至るも脫がれ難き殺生の報ひと思ひ諦らめよ」　上『今見る如く生前の因果を示し給ひしは比ひ稀なる高僧なり三郎苦しき息の下』　三「知らぬ事とは言ひながら雲逮殿に加擔なし導を送りしと何事ぞ免じて下され前生の兄上今生に

ての照主殿」　上「血汐に染し手を合せ詫れば照主扨はと察し」　照「ム、スリヤ我仕業と言ひ傲して綾子に嫉妬を起させしは伯父雲逸が仕業でわりしか然う聞上は日わらず悪人討て捨綾子小櫻が手向けになさん」　三「夫に引替三郎乞浮む瀬もなき五逆の罪」　空「アヽイヤ三郎欺くまじ汝四國の靈場を踏ひこと都て二十一度其功德に依り佛果を得んこと疑ひなき再生の證を與ふべし」　上「在合ふ小石を拾はせ給ひ矢立の墨で文字を顯わし三郎が手に確ッかりと握らせ給ふ御印文いかに三郎其小石こそ果報を得べき證據之夫を握りて再生せよ」　上「と示し給へは嬉し氣に」　三「チエ、忝けない唯此上は故郷へ告げ此處に一宇を營み下されたし」　空「いかにも願ひに任すべし」　上「仰せは今に阿波國燒山寺と申すなり」「ト橋懸りより弟子僧四人出て來り」　○「師の坊是に渡らせ給ふや都よりのお召として平郡の鞆成殿大急のお迎ひ」　□「吾々御供」　四人「仕つらん」　空「都よりのお召とわらば是より上洛致すべし」　照「我は悪人雲逸を討て乘なん」　空「過路の功德今爰に」　三「過去現在の御教化も」　照「御法の德に逢ふ杉と」　空「今より是を名づくべし」　上「仰せ置れし言の葉も枝も榮ゆる宗門の道を分つて行折柄」「ト照主仮花道へ空海弟子僧花道へ行く此時後ろより國見出て來り」　上「觀念せよやと切り込むを痛手にしッかと引捕え」　三「マッ此通り」「ト國見の肩先を切り下げる」　空「アヽ是も前生の悪業ぞや」　上「哀れはかなく」「ト三郎苦しみながらカッグリ落入る皆々は花見にて合掌する此模樣宜しく愁ひ三重にて幕

ト幕引付ると松虫入りの合方へ鳴物を冠せ双方へ這入る

八幕目　藤の賀能館の場　西寺門前の場

朱雀野身替地藏の場

役人替名

一空海	阿闍梨	一雜掌	宅郎
一賀川中將	照主	一徒弟	眞如
一平群	鞆成	一同	眞紹
一平群	鞆	一同	眞然
一乳母	虎枝	一同	圓澄
一藤の朝臣	能賀	一公家	六人
一守敏	僧都	一雜掌	二人

○本舞臺平舞臺八ッ藤紋散しの金襖上下塗骨障子家体戸家口橋懸り金襖都て藤の賀能館の体茲に公家六人住ゐ此見得樂の鳴物にて幕明く　○「いかに諸卿孟春より今に到つて雨

一滴降る事あく」□「民百姓の愁ひ一ト方ならず」△「守敏僧都をして雨を祈りの法を修せしめよとの勅諚なりしを」　+「空海も又天下の智識なれば」　◎「両僧の法德勝れし若に仰せられよと賀能卿の上奏」　×「今日両僧の法力を試みんとの義に就て」　○「見分の爲に當館へ參りし我々〔ト向ふより雜掌出て來り〕」　雜掌「東寺の一老空海和尚只今參上仕つて厶り升ると〔ト引返して這入る〕」　○「空海和尚參りしとなイデ此由を〔ト奥にて〕」

賀能「藤の賀能唯今夫べ〔ト出て來り當時君の導師たれば禮を以て請し申さん〕」　皆々「イザ出迎ひ申すべし〔ト向ふより空海出て來る〕」　賀「是は〳〵遠路の歸京太儀に存ずる」　空海「諸卿方にも恐入たるお出迎ひ」　賀「何はしかれ」　皆々「マヅ〳〵是へ」

空「御免下され〔ト舞臺へ來り〕シテ上よりお召の御用は」　賀「さればお聞われ早春より今日に至り雨一滴も降らざれば殊の外なる君のお歎き兼て不思議の通力ある西寺の守敏雨を祈らせ民の憂苦を救へよとの勅のり賀能上奏仕り貴僧をバ召寄しは俱に共に力を合せ民の愁ひを除さたき厚呂が存念元より法力同じければ両僧に勅命あるべき筈にして今日厚呂が館に於て則ち両僧を試すべしとの仰せあり此旨謹で領承われ」　空「仰せの程賢こみ奉るシテ又守敏いかなる不思議を見せ候ぞ」　○「去れば或時火の印を結び」　△「氷解て湯と變じ」　◎「水の印を結びしに忽ち炉の火消失せて」　+「宛も水を注ぐが如し」

賀「其爲すところ一ッとして不思議ならざる事なけれど自ら誇りて片腹痛き振舞のみ多かりけり」　空「拙僧も其由は承れども法力を競はんなど大人氣なしと止みしなり去れども此空海が居る場所にて豈夫左樣な不思議を顯わす事と相成まじ〔ト向ふにて〕」　○「守敏僧都の御入來」　賀「幸ひ守敏僧都わせられたとあれば魔法力を驗し見んコリヤ誰ぞ居らぬか〔ト奥より雜掌出て來る〕」　賀「西寺の守敏是へ來らば斯く計らへ〔ト耳やくことわつて雜掌と奥へ這入る〕」　空「拙僧は暫時別間を拜借仕らん」　賀「然らば彼れにて皆々「休息召れ〔ト空海上手家体へ這入る向ふにて〕」　○「御入來〔ト守敏出て來り〕」

守敏「シテ上よりの御用とは」　守「其義は唯今お聞せ申せどマヅ寛りと御休息コリヤ誰ぞわる僧都へ湯を參らせ」　雜掌「ハア、〔ト銀張茶碗を持出て來る〕」　賀「ア、コリヤ加減の程も如何あらんか是へ持て」　賀「コリヤ水でないか」　雜「是は鹿祖お湯と汲替て參り升せう」　賀「イヤ〳〵僧都は自在の神通わり何と此水にても湯となり升せうや」

守「夫は最と〳〵易き事」　○「然らば加持の威德の程を」　皆々「見せ給へ」　守「水知いたして厶る〔ト印を結ぶ上手家体にて空海同じく印を結ぶ〕」　賀「コリヤ是未だ元の水」　守「ハテおア〔ト賀能は湯と汲替へさせる雜掌直ぐに湯を汲み持來るを見て〕」

賀「是は亦余り熱うして手にも取られず僧都此湯に水をさして給わんや」　守「ム、〔ト又

印を結ぶ事わつて」法力奇特が見えたでムろう」　賀「イヽヤ未だ元の如く」　守「誠に此湯の冷へやらぬは妨爲す者ありと覺えたり」〔ト上手障子を明け〕　空「いかに守敏僧都愚僧茲にありとは知り給はぬか」　守「ヤおことゝ空海扨こそ夫に」〔ト起上る〕　賀「僧都何れへわせらるゝ」　守「ハテ何れへ參らんや空海わらば在りといふべきに隱すは卿の計らひか但しは上の御意なるや」　賀「いかにも空海と法力を試し旱魃の祈りをば命じ給はん君の仰せ」　守「左あれば一應言ふべきに不覺を取らせ給ひたる君も無面し貴卿も怨めし其處退き給へ」　賀「アイヤお受けも申さず退出なすは上みへ對して慮外ならずや」　守「イヤ空海壹人に仰せられよ」　賀「スリヤ何うあつても」　空「重ねて仰せ御無用でムる〔ト向ふ這入る〕」　○「思へば憎き守敏僧都」　□「此上ゝ空海に仰せ附らるゝやう」　△「急ぎ此由言上せん〔ト公卿下手へ這入る空海出て來り〕」　空「御合点常に含む遺恨の爲め此空海に自滅させん守敏が存念」　賀「何と言はるゝ」　空「拙僧此程より民の憂苦を救行まじ此度の旱魃は守敏僧都が爲せる業」　賀「ヤア」　空「拙僧此程より民の憂苦を救はんと一七日定に入り三千世界見渡せば守敏僧都呪法に依て龍神悉く壺中にあり天下の旱魃實に理りと申べし」　賀「スリヤ守敏が仕業とな」　空「若し空海力に及ばざれば自己一身の修法を以て雨を降さん守敏が謀計」　賀「然ちば力及ばずや」　空「氣遣ひ玉ふな北天竺大雪山の北に方り無熱池に善心龍王といへるあり守敏より上位の薩埵にまし升せば此龍王のみ封じ込む事能ゝざりし今此竜を勸請し請雨經の法を修しなばなどか雨を起さざらんや」　賀「シテ亦祈りの其場所は」　空「神泉苑にて一七日が間行ひ申さん」　賀「然らば麿ゝ是より直ぐに此由奏聞に達し申さん」　空「貴卿も何彼と」　賀「貴僧もいかい」　空「是も僧侶の〔ト袖掻き合すが道具替りの知らぜ役目に候ト此模樣宜敷く早めの合方にて此道具ぶん廻す

○本舞臺常足の二重石段の嶽込み此上四ッ足門西寺の額をかけ門の上下も筋塀松の釣枝すべて西寺門前の体茲に守敏弓箭を持立懸り平群鞆留めて居る此見得合方にて道具納まる

鞆「コハ僧都にゝ御出家の身を以て武器を携へ何んとなさる」　守「恨み重なる空海が歸りを待受け一ト矢を以て」　鞆「コハ物に狂ゝせ給ふか三千世界の龍神を封じ込しは貴僧の仕業でムりませうがや」　守「ヤ」　鞆「斯る惡行爲し給ふゝ智識高僧の振舞に候や此義は只管お止まり下さりませう」　守「ヤア汝空海をかばふよな其處退け鞆」　鞆「左程迄に思込み給ふ上ゝ是非に及ばず弓矢拜借仕らん」　守「なんと」　鞆「道ならねども鞆代つて空海を」　守「射て取ると申すか」　鞆「ハッ」　守「でかしか鞆我が鬱憤を晴しくれよ」　鞆「ヤヽ彼れへ來るは正しく空海」　守「鞆來れ〔ト門内へ這入る扉を閉る

上手より空海弟子僧付添ひ出て來り」　空「西寺東寺の両院と添けおくも桓武帝王城の守りとして朱雀門の東西に御建立あらせられ斯かる天災地妖を攘ひ國家安泰の法をも修すべき所なるを出家に似氣無き守敏が悪行空海今一言を以て通行せん門内へ申入れよ」　弟子四人「畏つてムり升る」　○「ヤア〳〵門内へ物申さん是は東寺の空海にて候也」　□「勅命に依り神泉苑にて明日より雨を禱り申すなり」　△「守敏僧都」　皆々「見物を致まれよ」　空「誠に東寺金剛界五百餘尊と無が如し嘸や佛も歎きつらん」　○「イザ師の坊には御歸院をバ」　空「ヲ、〔ト皆々向ふへ這入る守敏走り出て來るを〕　栖「コハ僧都にと又しても早まらせ給ふか」　守「ヤア憎さも憎し今の一言彼奴射て取れ猶豫致すな」　栖「全く猶豫と仕らねど」　守「ヱ、手ぬるいわい〔ト守敏は氣を熬立つ栖は是非なきとなし此摸樣早ま合方にて宜敷此道具ふん廻す

○本舞臺向ふ一面の筋塀上手に白木の衝門好き處に松の大樹都て築地外の体祝詞やうの鳴物にて選具納まるト向ふより賀川照主出て來り　守主「今巷の噂を聞に今朝太夫雲速始め宅郎虎枝彈正臺へ來りし由築地の外にて樣子を問わん然うゑや〳〵ト舞臺へ來り我紀州に歸らん都迄來りしに跡目願ひの爲め雲速等出京なせしと聞く今に思ひ知らせてくれ〔ト門の内にて〕宅郎「雲速公には暫時の間」　虎枝「築地の外にて」　両人「御休息あそばされ升せう〔ト照主小隱れする門の内より雲速宅郎虎枝出て來り〕　雲「此度の上京と照主國遠と申立賀川の跡目は血筋身共に願ひの爲首尾能く許しを蒙むる迄は彼の空海に出會ひなば若し妨げもあらんかと内々案玄居つたる處雨を祈りの勅命を蒙むりしとは某一ッの安堵を致したわい」　虎「斯うしてお供を致し升たも長の間苦勞した氣晴しがてらの都見物」　宅「斯立身を致し升たも兎角浮世は眞一直ぐでと身の出世が出來升せぬわい〔ト照主木蔭を出て〕　照「雲速殿唯今上洛召れしか」　雲「ヤそちは」　両人「照主殿」　照「いかにも照主なり此度び上洛と承り先へ參つて待受け申た」　雲「とは又何等の用あつて」　照「雖を報はん其爲に」　三人「何と」　照「隱すな雲速右衛門三郎より承とつたる汝が謀計執權職へ言上なし待共知らず死地に入つたる太夫雲速イザ尋常に覺悟致せ」　宅「モウ此上は手短かに」　虎「御身の望みを遂げるが近道」　三人「覺悟いたせ」　照「何を小癪な〔ト立廻りに成りトゝ照主危うく成る照主の懐中より一軸仕掛にて空中へ引上げる此軸に空海の像畫きあり敵役眼くらみ五体すくみしこなしにて〕　雲「合点の行ざる此有樣」　三人「コリヤ何うじや」　照「扨は和尚の我に力を添え給ふかアラ尊や忝けなや」　三人「何を〔ト又立廻りあつて虎枝は切附られ宅郎と悶絶し雲速は脇肚をえぐられる」　照「今こそ思ひ知つたるか〔ト雲速苦しみ落入る照主松の樹に懸りし畫像を取り〕　照「空

海阿闍梨に授うし御最期の畫像拔ム我身を守護なし給ひしか「ト卷き納める宅鄙心附き烟て懸るを」　甲「アラ有難や「ト一軸を突つけ宅鄙たぢろぐ照主一軸を頂くが道具替りの知らせ添けなや「ト宅郎刀を落してバッタリ落入る此見得ドロ〳〵合方にてぶん廻す

○本舞臺半舞臺後ろ黒幕中央二重本様附の辻堂地藏堂の額を掛け上下鼓壁松の立樹下手に東寺の勝示杭都て朱雀野の体月を飾し時の鐘にて道具納まる「ト向ふより空海弟子僧付添ひ出て來り」　弟子○「スリヤ師の坊にも日比御信心淺からぬ」　[「當地藏尊へ御參詣なな」　△「左様なれバお歸院の由をお寺へ達し」　×「直様お迎ひに參し」　四人「仕るで厶りませう「ト橋懸りへ這入る向ふより鞆伺ひ出て來り弓に矢番ひ覘ひを定める空海辻堂へ入り表向きに成り扉を閉めんとする」　鞆「エイ「ト切て放つ此矢空海の胸に當り辻堂の中へ倒れる鞆舞臺へ來り瞠と座し」　鞆「權化の貴僧をわやめしも是皆主君へ忠義の爲め空海殿お許し下され「ト足音する鞆小隱れする橋懸りより弟子僧四人出て來り」

○「ヤ、コリヤ師の坊にも非業の御最期」　△「必定の守敏の仕業あらん」　×「此由お寺へ告げ申さん」　○「何れも厶れ」　皆々「心得升た「ト橋懸りへ這入る引違えて鞆成桜明を持走り出て來り」　鞆成「ナニ空海和尚には殺害敷き死を遂げ給ひしとなりデ西寺へ踏込で「ト上手より空海出て來り」　空海「ヤレ待て鞆成吃相して何處へ參る」　鞆成「御最期と承りしにどうして茲へも」　空「なんと申す」　鞆成「合点の行ぬ是なる辻堂」「ト辻堂の扉を開くと地藏尊の木像の胸に矢立ちあり鞆成悔くり爲し」ヤ、地藏尊には主君の身代りに立せられしかや……」　空「是にて思ひあたる事あり最前西寺の門前通行の折り僧一人我前に立現はれ弟子共是に隨ひ行しが察する所日比信ずる地藏尊空海が身に代らせ給ひしかハ、ア添けなし「ト此時上手鼓壁の蔭より鞆下手鼓壁より守敏伺ひ出て來り」　守「扱こそ空海」　鞆「又もやお身に」　鞆成「ヤさういふ聲も「ト松明を差出すを鞆打落し月を隱し黒幕を切て落すと野面の遠見に成り鬼人探り合ひのだんまりあつは鞆は弓を拾ひ假花道守敏は本花道へ行く舞臺の両人すかし見て」　空「影も正しく」　鞆「曲者」　両人「エイ「ト小石を礫に擊つ両人身をかはして空海錫杖をつき鞆成足を踏出す是を一時の木の頭花道の両人は向ふへ走り這入る舞臺の二人は向ふを見込む此模様宜敷く跳への合方時の鐘の送り拍子幕

九幕目　神泉苑空海雨乞の場　西寺守敏僧都修法の場

役人替名

一空海阿闍梨　一守敏僧都
一平群鞆　一藤朝臣賀能

一同　靳成　　一公家六人
一弟子僧　眞如　　一百姓大勢
一同　眞然　　一仕丁大勢
一同　圓澄

○本舞臺向ふ淺黄幕松の釣枝爰に百姓大勢九條村と記せし簓鉦太鼓を持立懸り居る此見得神樂にて幕明く　○「何と皆の衆旱にも今歳のやうな目に會ふた事はない」　□「さいやいお上にも東寺の空海様に仰せられけふで七日の雨のお禱り」　△「其お坊様の御祈念ならモウお互ひの雨乞は止めにして」　×「御眞言でも唱へやうではあるまいか」　皆々「夫がよい〳〵」〔ト橋懸りへ這入る是より床の上るりに成る」　上るり『行空の天災既に月を追ひ日を重ねれど守敏が所爲に雨一滴も降ざれば天下の愁ひ一ト方ならず空海君の誠意を蒙むり神泉苑に壇を搆へ眞言奥旨の請雨經七日七夜を斷間なく揉みに揉むでぞ祈られし其慈悲心ぞ有難き』ト淺黄幕切て落す

○本舞臺平舞臺向ふ神泉苑の中遠見左右紫の幕を張り眞中に壇を飾り蓮の龍を正面に据え白木の三寶に百味の飲食燈明臺香炉經机等を置き都て神泉苑戒壇の体空海住居侍衆の長柄の傘を指しかけ仕丁大勢控え居る弟子僧四人好き處に控へ此見得上るりの切にて道具納まる

空「いかに方々空海敕を奉じて法を修し新禱なすこと七日七夜然るに未だ其驗しのあらざるは守敏僧都我行法を妨ぐると覺ゆるぞや」　○「此上は憑僧等參つて」　四人「イデ守敏めを」　上『と起んとす時に此あたに聲あつて』　智能「ヤレ騒がれな方々」　上『衣紋正しく藤の朝臣部々と立出給ひ〔ト上手より公家六人附添ひ出て來り〕　智「此神泉苑に壇を搆へ已に修法七日に餘れり然るに雨一滴降らざれば叡慮の程も如何わらんと是へ參りし折からに承りし貴僧の一言シテいかゞ召るゝ御所存に候ぞや」　空「我〻天下國土の爲め彼は害を爲さんと祈る者なり正法邪法の其爲に驗しなくんば天地の中神も佛もあらざるべし守敏が修法を破れや者共」　上『御珠數を以て邊りを攘ひ壇向はれし戒壇に法を修したる請雨經讀誦に碎く肝膽を天地感應の時到り俄かに一天搖き曇り降り來る雨は車軸の如く篠を乱してしだらでん忽ち潤ふ天が下愁眉を開きて勇まし〔ト大雨の音に成り賀能と空を見上げる皆々祈念のこなし此見得床の三重にて此道具ぶん廻す

○本舞臺平舞臺大人間九太柱眞中須彌壇軍荼利夜叉の背輪を掛け佛具一式を飾り護摩を焚き正面に守敏住居都て西寺本堂の模様床の上るりにて道具納まる　上るり『移しける西寺の内には守敏僧都空海を妨げんと軍荼利夜叉の法を修し護摩の烟に七日の間爛りかへつて斷りしとうたてかりける次弟あり靳と主人を諫めかね引籠つてありしかど今と見兼て堪り

得す本堂に走り入り（ト橋懸りより鞆走り出て來り）　頓「情けなき僧都のれ心今より偏頗偏執の御心を飜がへされ空海和尚と心を合し倶に王法を守護なし給へ」自然御高德世にも聳はれん此度びの諫言に用ひなくんば御目通りにて腹掻切り相果い抛若の覺悟」　上「忠義に厚き鞆が諫め守敏更に耳にもかけず怒り烈しき上枯藤」　空「ヤア姦し、平群の鞆守敏命のあらん限りは敵對として置べきか」　頓「スリヤ如何程に申上ても」　空「ヤア我行法の妨げなり疾々其座を立去るまいか」　上「一心變せぬ守敏が顏色怒氣を含むで見えたる折しも俄かに陰雲天を覆ひ金色の龍虛空にかけりいかづちふるひに鳴り出せしは大變」　頓「一天俄かに掻き曇り金色の龍現れ給ふは空海」　空「我龍神を封ぜたれども唯北天竺無熱地なる龍和尚が修法にて雨を起すと聲えたり」　頓「空海和尚の行法に及ばざる事斯くの如し彼と和睦なし玉へ」　空「ナニ空海如きに劣るべき見よ〳〵此龍神封じ込女のみと力及ばず洩したり扨は空海彼の龍王を招くよな」　頓「空海和尚の行法に及ばざめいで置べきか」　上「一念凝つたる守敏僧都壇に臨んで責かけ〳〵印を結んで祈請ある祭文經文錫杖の音法まじく姦風につれて降出す其雨は瀑を亂して車軸の如く雨を止むる守敏が秘法更に驗しもアラ不思議や五体すくんで壇上より眞逆樣に頭轉倒是は一驚き駆け寄る鞆」　頓「コハ御主君には如何遊ばせしぞや」　上「いたはる手先を振拂ひ壇に臨めば忽ちに颯と吹き來る颶風震動雷電霹靂波土もすべき有樣に少しも恐れず大音聲」　空「八大龍王三世の諸佛守敏が祈禱止雨の大願納受あれ」　上「一心不乱の守敏が修法鞆袖に取縋り」　鞆「平に止まりたび給へ」　空「ナア其處退け〳〵」　上「支え留るを振切り止むる甲斐も風につれ砂子を飛す雨の脚水の雨はと紅蓮八寒地獄叫喚の呵責も斯やと目のあたり」　空「龍神元の池水に歸し吾大願を納受なし給え軍荼利夜叉明王」　上「擁護を加へたび玉へと禱る奇瑞も驗しなく雨は增々烈しきにぞ」　頓「いかほど祈り玉ふとも車軸を流す此大雨あなたのお耳に入升せぬか」　空「扨ては空海が法力には及ばぬかム、一敏立身に苦しみ血を吐きト倒落入る　頓「ヤ、僧都には修法に御身も勞れ果てかなくならせ給ひしかヤ……」　上「取縋れども其甲斐も涙にくれし其拵柄遙かあなたに聲あつて」　空「アイヤ鞆歎かれな」　上「〳〵御聲高くのたまひつゝ立出玉ふ空海阿闍梨後にた平群の鞆成始め徒弟の衆も附隨ひ靜々西寺に立寄り玉へば鞆見るより是はと計り身を謙くだつて敬ひける空海重ねてのたまわく」　空「守敏名利の志甚だしく正法の密敎を妨げんとて却つて其身を亡せしは是非もなき次第なり必らず共に歎かれな」　頓「貴僧の高德は豫てより存ずれども主從の因み棄難く逆を助けし身の申譯はマッ此通り」　上「刀拔

くより髻を切て拂へば鞆成も髻ふッつと切て捨』　鞆「我も主君の其爲めに兄に是迄敵對し其言譯には斯の通り」　空「善哉両人鞆と今より兄弟共御兄子と爲して給はる樣」　鞆成「偏に願ひ」　両人「奉る」　鞆「思ひ廻せゞ報ひは目前」　鞆成「守敏僧都の此有樣」　空「是正法に敵對し」　○「現罰忽ち」　皆々「斯の有樣（ト鞆守敏を抱起すと目を開き居る空海ホロリと思入あつて空「我眞言を守るべしト弟子の持來りし椅子にかゝり獨鈷と珠數を持ち眞影の見得守敏は含み紅を吐く皆々空海を禮拜する　上『尊とかりける（ト三重雨の音にて幕

大詰　紀州高野山の場

役人替名

一初平伊豫守　一宮奴花丸
一徒弟眞雅　一同竹丸
前名平群の鞆　一同松丸
一同眞濟　一同梅丸
前名平群の鞆成　一神職丹用　要人
一侍女菊野　一侍女小雪

一同藤浪　一同櫻木　一空海阿闍梨　一半素袍の侍惣出

○本舞臺向ふ淺黄幕松の鉤枝一セイ山風の鳴物にて幕明くト床の上るりに成る　上『間祇く其名和朝に高野山金剛峯寺と開えし信長書百義の本山にて往昔大師出現の二丈にひらき給ひしより千代もかはらぬ宗風の榮え榮ふる三鈷の松の何しを爰に法の山ト淺黄幕切て落す

○本舞臺平雛臺山及山の中遠見上手に天野神社遠とせし勝示杭松の鉤枝都て高野山半腹の模樣茲に伊豫守下手に侍女四人上手に宮奴四人此前に丹生丹下役ろに惣出の人數花を入れたる竹筒を持ち控へ居る此見得音樂にて道具組成る　甚「降る雪の積れば最ど高野山浮世の道や」　皆々「隔てはつらん」　甚「我如何なる過去の惡業にや產れながら片手をひらかず何卒大師の冥助をば仰がんものと万燈供養の伊豫守」　要人「其御案内として天野の神の神職要人」　世「マヅ何よりは當山の四季の眺めを尋ねたし」　上『聞かまほしゝとありければ神職扇を笏に取り』　要「されば當山の義は彼の八葉の峯四方に續り常に霧の滿渡り時み雲りみ四ツの時定まることのいわずソレ宮奴共常に眺むる風景をば此處にて少しも早ち」　上『宮奴はハッと遐りを打ながめ』　花丸「ソモ當山は冷氣烈しく睦月如

月彌生の春も過ぎて卯月の半ばの頃」　極「梅も櫻も一ッ時に初めて笑ふ山々の眺めも奥の深緑り」　竹「花も浮世の春待に後れて咲し殊勝にて皐月の空の時鳥」　松「葉月の菊に置く霜もいつかは雪の降初めて」　花「梢に明さぬ夜半もなく身さえ氷の」　四人「豆腐汁」

上『まめなるから高野そを興じてこそは述ければ伊豫守興に入り』　伊「シテ又彼れに言へしは」　要「われぞ則大師の母君女人を禁ずる此山へ入らんとせしかば鳴動なし」　花「火の雨降て大龍現はれ一歩も進むこと能はず」　梅「母君罪障深きを歎き捨衣給ひし其石を捨石とこそ申なり」　花「遙わなたは」　四人「女人堂」　侍女「そんなら彼れが」　四人「女人堂とや」　要「早く大師の御入滅に會ひ給へ」　皆々「心得て候」　上「分け行けば法の都と稱えにし寺門の街堂塔の甍さはもき万燈會御法の光尊とくも歩み輪しき坂路を女人堂にぞ着にけり」　〔ト皆々假花道より戸家口へ廻り本花道へ來り〕　伊「茲ぞ女人結界の地にして是より内は女を許さず遙かに禮拜致すべし」　女形「有難う厶り升る」　伊「禮拜済めば麓にて下山を待ちやれ」　侍女「左様なれば妾共」　梅「ふ侍申すで」　四人「厶り升せう」、　上『言ふも優しき腰元乙花を騎して立歸る』　伊「イザ宮奴には御法の場へ」　四人「御案内仕り升せう」〔ト是にて道具を打返す

○本舞臺向ふ大師の御廟高野山切出しの遠見後ろ淺黄幕　爰に空海立身左右に弟子僧六人控へ居る此見得宜敷く道具納まるトみな〳〵舞臺へ來る　空海「我教法を護り奉らんと諸ろ〳〵の弟子をたのみて永眠せんとおもふなり」　伊「スリヤ空海和尚には最早御定に」　皆々「入り給ふとな」　空「いかにも今年今月今日」　弟子ロ「則廿一日寅の刻」　ム「御入定爲し給はんとの」　四人「御御せ」　空「我死せば彌勒慈尊の御前に侍べる可し其時勤めあらん者には幸を授けしめん努々疑ふこと勿れ」　伊「某如何なる前世の恩因にや産れながら隻手を開かず何卒大師利益をば願てしら存じ升る」　皆々「南無大師遍照金剛〳〵」　上『時に不思議や眞言の功力に依て伊豫守忽ち開きし掌より出でし小石を拾ひ上げ』　伊「右衛門三郎再生を契る空海と読せしは」　空「汝が前生は伊豫國御原の里郷士にて右衛門三郎と申者四國の靈地を二十一度遍歴せし功德に依り前生の悪業滅し伊豫守と生れしものなり」　要「一國一城の主と産れ玉ひしも」　空「眞言歸依の」　皆々「御功德」　伊「かなはぬ掌の開きしは何に譬ん我悦び」　良雅「師の坊御入定の法樂に」　良濟「一トさし御舞ひ候えや」　伊「ヲ、」　論「高野山梢の高み時しくも雲か懸れる空ならで照る日ぞ消さん照る日にもまさる御法の燈火は幾世經るとも消え果じ〳〵〳〵〔ト淺黄幕切落すと万燈の遠見に成り〕　空「眞言歸依の輩は」　皆々「信心怠ることなかれ」　上『永く三法の曉を照す功德め万燈に

光りあらそう一燈は白河燈と名に高く輝く法を尊とけれ』と皆々居列び宜敷く床の段切に

幕

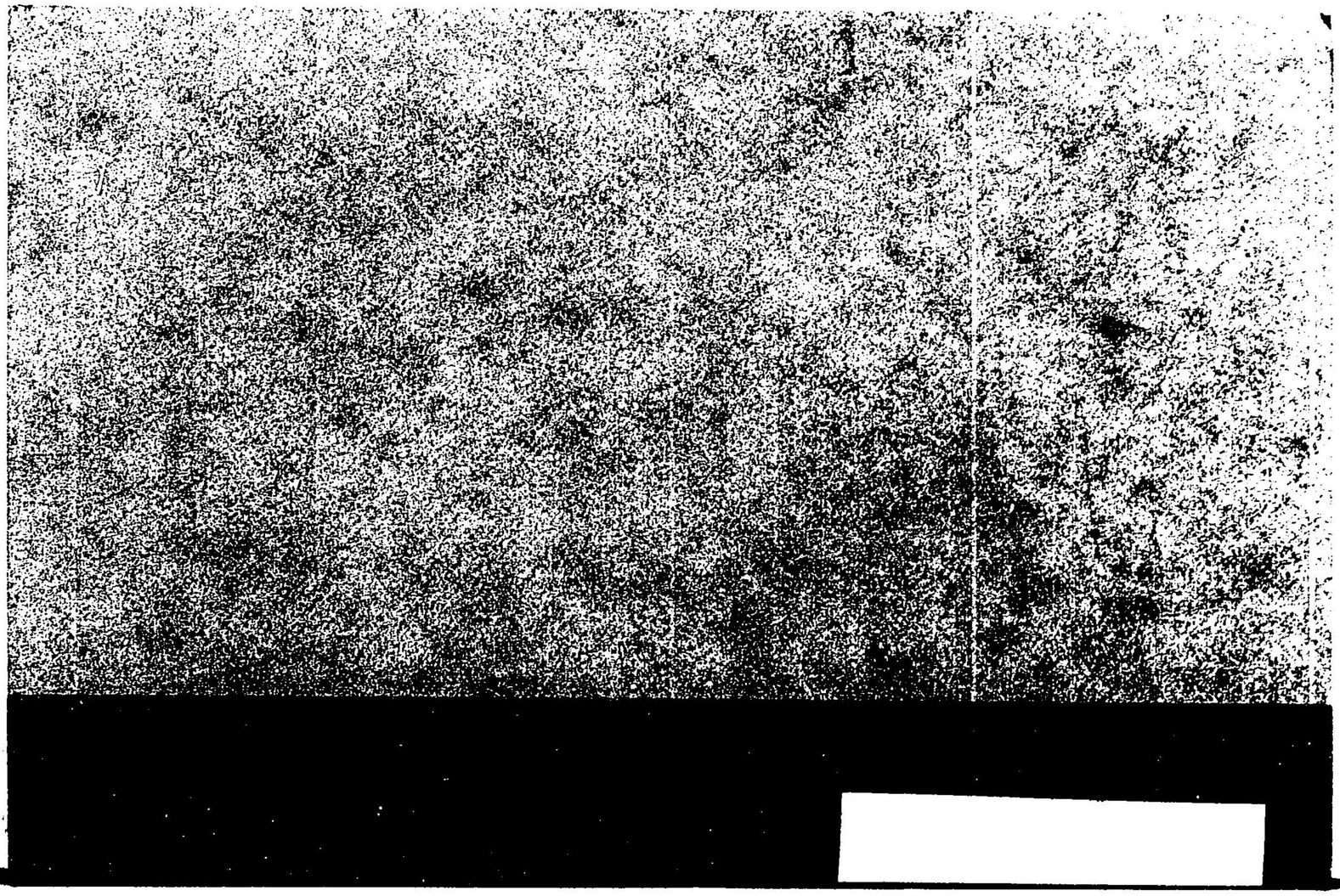
演劇脚本 弘法大師御傳記 畢

明治廿七年一月五日印刷
明治廿七年一月十二日發行
定價（拾六錢）

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷
著作者 勝彦兵衛
兼發行者 勝藏事

大阪市東區内本町橋詰町六十八番屋敷
印刷者 前田菊松
周擴合資會社

版權及興行權所有



特51
655

演劇脚本 弘法大師御伝記

国立国会図書館

088538-000-6

特51-655

弘法大師御伝記

勝　諺蔵／著

M27

DBJ-0195